274-22

明治二十九年三月發行

319.02
I374g

外交と外征

伊藤博文著

9.02
374g

国立国会
25.12.4
図書館

219209

緒言

一本書は曾て稻垣滿次郎氏が伯爵會の請に應じ演說せられたる『歐洲近時の外交』及仝氏が曾て東邦協會に於て演說せられたる『外征進化の大勢及其應用』といへる筆記を參酌し、方今外交多事、國民最も對外思想を養ふを要す、今日此の書を出版する只管其の急に應ぜんと欲するに在り

一『歐洲近時の外交』を『外征進化の大勢及其應用』と共に戰後我が邦の東洋に於ける

目次

(一)日…… 一
(二)歐洲近時の外交…… 一二
新三國同盟の由來
伯林會議及其後の露佛墺……
露土戰爭
(一)露土戰爭の起因…… 二三
(二)平和條約の申出…… 五
(三)露國の對外政策…… 五
(四)サンステフアノ條約…… 七

位置關し、一國の力針を論斷するに在り、去れど其立論の點各を異なるよりして其脉自から異ならざるを得ず、讀者能く玩味せば自から其の中に一致する所を見ん

一本書固演說を基礎せるものなれば、文章隨て談話の如き本色を露はすものあり、是れ却つて本論者の本領を覗ふの便あらんか

明治二十九年仲春

著者

民友社

伯林會議

（一）英露の衝突……九

（二）伯林會議の招待……一〇

（三）英國の主張……一二

（四）列國會議の性質……一四

（五）列國會議は果して開かるるや否や……一五

（六）獨墺會議の會長と用語……一九

（七）伯林會議の形勢……二〇

獨逸を中心とする歐洲の外交

（一）露・獨を怨む……二四

（二）佛國戰爭に於ける露國……二五

（三）伯林會議後の露獨間……二八

（四）伯林會議後の露佛關……三〇

（五）獨墺佛の三帝同盟……三一

（六）ビスマークの外交政策……三三

（七）三帝同盟の修正と新三國同盟の發生……三五

英國を目的とする歐洲の外交

（一）新三國同盟の目的……三八

（二）露佛獨に對する英國の位置……四一

（三）印度及北米大陸に於ける英佛……四二

（四）東方問題の起源……四四

（五）英の對歐洲大陸政策……四五

（六）東歐に於ける英露……四六

（七）英露衝突の端緒……四八

(ろ)露帝獨英に結ばんさせり……四七
(は)露の對佛主方案……四九
(に)英の表裏政策……五〇
(七)波蘭土の分割……五一
(八)ポーリスカ、オルスタの問題……五三
(九)獨佛戰爭に對する英國……五四
(十)露土戰爭に對する英國……五七
(十一)露人英相を招待せり……五九
(十二)東羅馬問題に對する英國……五九
(十三)スエズ運河に關する英佛……六〇
(十四)英の赤道區域……六一

東洋に於ける歐洲の外交

(一)日清戰爭に對する英國……六四
(二)英の對亞細亞政策……六七
(三)歐洲に於ける東洋事情……六九
(四)新世界に對する英國……七〇
(五)英の將來の東洋政策……七二

日本將來の外交

(一)……七五

外征進化の大勢及其應用

總論……八三

進化の定義……八四

外征進化の第一期—個人的功名心欲望（パーソナルアンビション）……八六

日本神武東征……八六

(甲)兼倂戰爭……八六

(乙)羅馬時代……九〇

(丙)手段と目的との混淆……九二

(一)羅馬人の長所……九二

(二)十字軍……九三

(三)西班牙國王位繼承に關する戰爭……九四

(丙)手段と目的との混淆を誤認したる時代……九七

(一)羅馬人の長所……九七

(二)サラセン人の長所……一〇〇

(三)十字軍……一〇〇

外征進化の第二期—王統的功名心欲望（ファミリアンビション）……一〇二

(一)歐洲大陸諸强國の興起……一〇二

(二)墺地利即獨逸帝王系統的戰爭……一〇六

外征進化の第三期—國家的功名心欲望（ステートアンビション）……一〇七

(一)三十年戰爭……一〇七

(二)佛國王路易十四世の政策……一一〇

(三)西班牙國王位繼承に關する戰爭……一一一

外征進化の第四期—國民的功名心欲望（ナショナル アンビション）
（一）オリーヴァ、クロンウエルの政策……一一四
（二）七年間戰爭——老ピットの政策……一二〇
（三）佛國革命……一二八
外征進化の第四期より第五期に移る媒介期—奈翁
一世の政策……一二九
外征進化の第五期—宇宙人類幸福の增進（プロモーション、オフ、シー、ウエルフアー、オフ、メンカインド）
（一）世界の平和を保全し各國各其國利を進む……一三八
（二）世界の文化を指導して人類本然の義務を全ふす……一三八
外征進化の應用
（一）歷史上の例迹外征進化の誤用の證左……一四五

（二）戰勝後に於ける日本帝國は第十九世紀外征進化の大勢に則りて之を經營するの必要……一五三

歐洲近時の外交

新三國同盟の由來

稻垣滿次郎

三國干渉
三國同盟の由來

伯林會議及其後の歐洲外交

露獨佛の新三國同盟は我が邦が清國より得たる遼東半島を還附せしめたり、彼れ等は之に止まらず、其の還附の代償金の事に迄關係せり。何故に新三國同盟は出來たるか。之を究むるには先づ伯林會議及其後の歐洲外交史の大略を尋ねざるべからざるなり。

露土戰爭

伯林會議

(一)露土戰爭の起因

伯林會議は我が明治十一年、即ち西曆千八百七十八年、獨逸の首府伯林に開らける所の歐洲列國會議なり。何を以てか此の列國會議は開かれたる。

スラブ人種南進

夫れ露西亞人は「スラブ」人種に屬す。斯の人種の膨脹するや西曆四百五十年頃より漸次南進してバルガン半島に殖民せり。此の「スラブ」人種がバルガン半島に移住するや、貴族は地主となり、一般人民は小作人となれり、土耳其が亞細亞より起てバルガン半島を征服するや、是等地主たる貴族は土耳其の甘心を買はんが爲めに、從來奉ずる所の耶蘇教(希臘教)を棄てゝ回教を奉ぜざるべからざるに至れり。去れど一般の

貴族改宗

小作民は土耳其政府の意を迎合するの要なきを以て、依然耶蘇教を信奉せり、是れバルガン半島爭亂の源なり。

宗教軋轢

既に地主たる貴族と小作人とは奉ずる宗教を異にせり、互に軋轢を生ずるは免かれざる所なり、千八百七十五年即ち我が明治八年に至り、其の一部たるヘルゲゴビイナ國は土耳其政府に反せり、即ち耶蘇教國民は回教國に反したり、翌年に至りバルガリヤ國亦た土耳其に反せり。

謀反續々

土耳其政府はバルガリヤの反民を征討せり、征討中土耳其の處爲實に慘酷言ふに忍びざりき、露西亞は之を觀てバルガリヤ問題に干渉を始めたり、蓋し露西亞とバルガリヤは同人種にして同宗民たるを以て、露帝は之を保護するの義務を有すと云ふに在り。謀反は漸く廣がれり、サアビヤ反し、モンテネグロも亦た反せり、歐洲列國は寧ろ反者に同情を表し、之れを援助するに傾けり、蓋し耶蘇教民が回教政府に反對

露西亞の干渉

同人種同宗民

歐洲の同情

したるものなればなり。露政府が此の際默止し能はざりし所以のものは、反者が土耳其政府に征伏されんことを恐るればなり、故に露政府は土政府に迫て休戰せしめたり、歐洲列國は相通じて耶蘇敎民を助け、且つ土國の行政改革を迫れり、土耳其政府は國權を侵さるゝを嫌ひ、甘んじて干涉を受くるを肯ぜざりき、露西亞、獨逸、墺地利の三國は各〻宰相を出して會議を開き、土耳其の改革案を作れり、去れど實行せしむるを得ざりき。英國も亦た出でたり、彼れは主唱して列國會議を土都コンスタンチノープルに開き土耳其改革を議せり、是れも無効なりき、反者と土政府は猶ほ對壘し、土政府は是非反民を征伏せんとせり、露政府も默過せず、回敎政府より慘酷に遇せらるゝ同宗民、而かも同人種を保護すと稱し、遂に土政府に對するの宣戰を布告せり、是れ實に千八百七十七年、即ち我が明治十年の四月二十四日なり

（二）平和條約の申出

斯くて露土戰爭は闘はれたり、就中ダニューブ河を渡りプリピナに激戰せる如きは人の知る所なり、露軍は連戰連勝せり、次第に土耳其の首都に迫れり、土政府危急なり、遂に仲裁を英政府に托せり。是れ千八百七十八年の一月なり、

英政府は露政府に懸け合へり、露帝は答へり、土耳其にして露の總督府に直接に懸合ふに於ては休戰を諾し且つ平和條約をも締結せんと。」土都の危急は旦夕に迫れり、露軍がコンスタンチノープルに進入するは數日を出でざる形勢なり、即ち我が軍連戰連勝、山海關の一戰を爲せば北京に進入すると云ふと同一の形勢なり、英は此形勢に於て露土の間に取次人をして立てり、宛然米國が日清國の間に立ちしが如し。

（三）露國の對外政策

露國の目的は豈に單に同宗民同人種を保護するに止まらんや、全躰露國の對外策に兩面あり、一は東歐に於て、土耳其を征しコンスタンチノープルを取りて以て西歐に當り、一は東亞に於て、滿州を取て以て南下するに在り。滿州經營は鐵道發明以前より定まれる政策にして、近年に至り理學の進歩より鐵道を布設し、軍隊若くは貨物を送るを得るに至り、露國の對外政策の基本を應用するが爲め、西比利亞鐵道布設の擧も出で來れるなり。去ればこそ日本が滿州を取らんとせしに當り彼れは新三國同盟を創作して日本をして遼東半島を還附せしむるの政策を執りたるものにして、個は苟も外交の局に當るものは之を豫想するに難からざるなり。土耳其經營は彼得大帝以降傳來の對外政策にして、同宗民同人種保護の如きは正に此の政策中の一機會を捉へたるに過ぎざるなり。

(四)サンステファノ條約

露土の間に休戰は行はれ、條約は締結せらるゝことゝなれり、同年三月三日土都コンスタンチノープルより少しく隔たれるサンステファノと名る小村に於て調印せられたり、余は土耳其に遊でサンステファノを過り當時條約の締結せられたる家を見たり、極めて狹小なる家屋に過ぎず、今尙ほ紀念として保存せりと。

此の條約を締結せるは有名なるイグナチーフなり、彼れは英佛聯合軍が清國北京を陷れしとき、英佛及清國間に仲裁して黒龍江沿岸州を割かしめたる敏腕を有す、彼れは此のサンステファノ條約すら豫め用意することなく僅に二十四時間に書き上げ、外交官をして驚愕且つ舌を捲かしめたり。

此の條約に依て、サアビヤ、モンテネグロ、ルーマニヤの獨立を許し、

而かもベルガリヤも全く獨立國として之を許し、政治上及軍事上のことは自由とし、ベルガリヤ國王は之を民選にして土帝の許可を得列國の承諾を得べしとせり、且つ二ケ年間五萬の露兵を留めて此處を守らしむることゝせり、

露國の目的

斯の條約の重なる問題はベルガリヤ王國を建て、土耳其を二個に中斷し、而かして中央に置かれたるベルガリヤは南境、地中海に連なるエーゲアン海にまで突出することゝなれり、露國の目的は「スラブ」と云ふ同人種希臘教と云ふ同宗教の國を保護しおくに於ては他日露國がベルガン半島を悉く略取し土耳其を滅すの基礎となり、ベリガリヤ國を以て地中海まで突出し居るに於ては英の勢力を地中海に制するを得ると云ふに在り。

西歐に當るの基礎成らんとす

條約は調印せられたり、露國が西歐に當るの基礎成らんとす、之れに

英國の利害印度の通路遮斷

初め局外傍觀

對する英國は如何。

伯林會議

(一)英露の衝突

サンステファノ條約に尤も痛切の利害を感ずるは英國なり、露國が地中海まで膨脹し來るときは、英は其本國と印度間の通路を遮斷せられ、隨て英國の富源を杜絶せらるべし、故に英國は極力其の斷絶を防がざるべからず。

初め露土兩國が開戰するや、英國は僅に蘇士運河を封鎖せざるべしと雖も軍隊を埃及まで進めざるべし、如何なる事情あるも露國はコンスタンチノープルを占領せざるべしとの條件を以て局外より之を傍觀したり、然るに露國が平和條約を結ぶの結果、土都コンスタンチノープル

にまで迫り來り、露軍が本國の訓令を待たずして土都を占領し了るの形勢を爲るにはあらずやとは、英國の憂慮に堪へざる處にして、今や外交の失敗を招くべき時にあらずとの考を以て、英相ビーコンスフヒルドはサンステファノ條約締結に先ち千八百七十八年即ち我が明治十一年の一月廿三日に、露土戰爭に對する英國の政策趣意書を議會に提出し、軍事費を要求し、印度兵を地中海のマルタに派遣し、地中艦隊をコンスタンチノープルの海門に送り、露國にして若し英國に案内もなく土都へ進入せん乎、英國は忽ち地中海艦隊を以て之を砲撃するの覺悟を爲せり、越て二月に至り、英露の間復た戰はざるべからざるに至れり。

英露の間切迫

（二）伯林會議の招待

外交の局面は急を告げたり、普佛の戰爭を了し獨逸聯邦を建て、以て

歐洲に雄飛する所のビスマークは之を觀て、咼て云く、『英露斷じて相戰はじ、世豈に象鯨相鬪ふの變態あらんや』と埃國首相アンドレッシー伯は謂へらく、英露若し相戰はゞ埃國は局外中立を保つを得ず、勢ひ向背を決せざるべからず、今英露兩國を觀るに孰れも與に結び難し、且つ英露相戰はゞ延て全歐の爭亂に至るも知るべからず、埃國の大事斯の時に在り、如かず巴里の會議、倫敦の列國會議の例に準じて列國會議を開て斯の局を結ばんにはと、彼れは玆に列國會議を申出せり、是れ三月七日なり、而かして列國に照會するや、ビスマークは先つ埃相が列國に照會して列國之に出席すべしとの確答を得ば、自ら招待狀を發して會議を伯林に開かんと答へたり、是れより三四五の三ケ月は列國の間に電信の往復頻りにして列國會議出席を確かむるに費やせり、列國彌々出席を諾するに至り、六月三日を以てビスマークは主人格を

以て列國に招待狀を發し、玆に所謂伯林會議を開らかるゝに至れり。

(三)英國の主張

斯際英國の主張せし所如何、何を以て強硬なるを得たるや、蓋し千八百五十六年の巴里會議に於て結べる條約に『東歐問題に關しては巴里會議に列席し其條約に調印せる列國の承諾せざる條約は無効とす』との主意あり、猶ほ千八百七十一年倫敦の列國會議に於て、再び之を確かめ『東歐問題は巴里倫敦の列國會議に列席せる列國が調印して承諾を表せる條約に非ずんば無効なり』と約せり。

列國傍觀

然るに露國は頻に土耳其と戰へり、列國は手を斂めて之を傍觀せり、露國は之を觀て以爲らく列國干渉の憂なしと、直接に土政府と談判を開き、列國に諮らずして條約を訂結せり、訂結し了るを觀るや、列國殊に英國は主として異議を申し出せしなり。我が日本國が征清の際に於

干渉は條約調印後に來る

ける外交上太だ之に類せるものあり、初め列國は仲裁らしきことを申し出でざるに非るも、中ごろより手を斂めて傍觀せり、是れ日本の外交家が最も愼密なる注意を要するの時期にして、列國の干渉なるものは平和條約の調印を了するにあらざれば概ね容り來らざればなり、外交史上之を證すること頗る多し、蓋し條約の未だ調印せられざるに當り其條約の條件なりとて傳ふる所を捉て以て容喙するに於ては或は否な去る條約を結ぶことなしと對へらるゝも知るべからざればなり、故に英國の如きも六百萬磅の軍事費は議會に協贊せられ、戰爭の準備も整ひながらサンステファノ條約の調印せらるゝ迄は露土の外交上には容喙を爲さゞりしなり。

條約一たび調印せらるゝに當ては最早猶豫せられざるなり、故に英國は露土平和條約に就て手強く容喙せり、露國も之に反對するを得ざる

「コングレス」と「コンフエレンス」の別

なり、露國は土耳其に對しては全勝を占めたり、日本が清國を征せし時程連戰連勝ならざるも、バルガン半島を破り土都に迫れり、去らば英國なる新敵と戰はざるべからざるに至ては如何、露兵勇なりと雖も疲れたり、英國は之を察して太だ強硬なり、露國屈するを好まずと雖も徒爲に屬するの憾あり、會々墺國が列國會議を申出せるに遭ふ、乃ち喜んで列國會議に列することを諾せり。

（四）列國會議の性質

「コングレス」と云ひ、「コンフエレンス」と云ふ、齊しく列國會議なりとす、去れど「ナポレオン」一世を破りて、墺都維也納に開らきたる列國會議は「コングレス」にして、千八百五十六年の巴里會議も「コングレス」なり、「コンフエレンス」は列國が開會地駐在の全權大使、若くば全權公使をして出席せしむるものにして、「コングレス」は特に列國の首相、若くば外相をして出席せしめて開らく所の會議なり、伯林會議は即ち首相若くは外相の特に席するものにして「コングレス」なりとす。

（五）列國會議は畢竟歷史より來る

我が征清の偉業に際しても此事局を列國會議に持ち出すの議論なきにあらざりき、開戰前に一回、三國干涉の起りたる際一回、凡べて再回起りたりき、去れど斯の論は採られざりき、蓋し露土戰爭の局を伯林會議に依て結びたりとも、之を東洋の事局に適用し來る謂はれなければなり、彼の伯林會議なるものは抑も歷史上の由來あり、單に露土戰爭の事局を結ぶが爲めにあらざるなり。

歷史を按ずるにナポレオン一世が歐洲を蹂躪するや、歐洲列國は之れに反抗せんが爲め千八百十五年に墺都維也納に會合せり、斯の時使臣

を出席せしめたるは墺地利、西班牙、英吉利、葡萄牙、普魯士、露西亞及び瑞典の諸國なりき、之を列國會議の起原とす、第二回は千八百五十六年巴里に於ける列國會議なり、當時の出席者は英、佛、墺、露及伊太利なり、但伊國は當時猶ほサルジニヤと稱せり、巴里會議は英佛聯合軍が土耳其を援けて露國と戰ひ、セバストポールを陷れたる戰局を收むるの會議なりき、維也納會議の當時は歐洲の形勢に關する條約は其大躰に止まりしと雖も、巴里會議に至ては彼の東歐問題は已が一國を以て獨り之を處分することを得ざるの條約を結ぶに至れり、第三回は千八百七十一年の倫敦に開らける列國會議なり、是れ露國が其の軍艦を黑海に浮ぶべからずとの巴里會議に於ける條約を破りたるに由れり、斯時東歐問題は列國の承諾を得されば有效ならずとの條約を訂結せり。

彼の露土戰爭前、ベルガン半島民が土政府に反せし際に於ても墺相アンドレッセー伯先づ趣意書を草し之を列國に謀れり、英佛兩國之を承諾せしと雖ども、他の諸國が之を承諾せざりし爲め其儘になれり、尋で獨逸のビスマーク、露國のゴルサヤコーフ、及び墺國のアンドレッセーの三相相會して趣意書を草し、列國の同意を求めり、伊佛兩國は之を諾せしも、英國は諾せざりき、尋いで英國の發議を以て土都に列國會議を開らけり、其の結果遂に露土戰爭と爲れり。

斯くの如きの歷史を有す、故に露獨り東歐問題を處せんとするは列國の容さゞる所たり、而して獨り露土間に訂結せる條約は効力を有せざるなり、故に伯林の列國會議は開かれたるなり、我が東洋には一も是れ等の歷史なし、況んや條約をや、若し一たび列國會議の端を開かんや、忽ち慣例と爲りて、後來東洋問題は悉く列國會議に依て決するの面

倒を見るに至らん。東洋の局面に處するもの愼思せざるべからざるなり。

伯林會議の將に開かれんとするや、英國は尙も注意して云はく、露國若し列國會議に於てサンステファノ條約を逐條審議することを諾せずんば英國は之に出席する能はずと、露國は之を否めり、曰くサンステファノ條約中西歐列國の利害得失に關係する箇條のみを議題とせむ、其他は審議すべからずと、於是乎伯林會議は遂に成立を告げざらんとするの觀ありき、時に倫敦駐劄の露國大使シュバーロフは英政府に懸合て曰く、露國が幾ばくの讓歩を爲さば伯林會議は成り立つべきやと、英相ビーコンスフヒルド之に對へて云、バルガリヤを二分してバルガリヤと東ルーマニヤの兩國とすべし、バルガリヤは地中海の岸に領土を有すべからず、其他に一箇條ありき、露國之を諾せば伯林會議は

成立せんと、蓋し英國は露國がベルガリヤを併呑することを悞るればなり、斯くの如くにして伯林會議に出席する前に於て、露英の間密約をなして列國會議に臨めるなり。

（六）伯林會議の會長と用語

伯林會議は千八百七十八年即ち明治十一年の六月十三日に開かれたり、獨逸の首相ビスマークは主人格にて招待狀を發したるを以て、慣例を以て其會長に當れり、曾て土都に開きたるときは土國の外相が會長となれり、若し日本にして列國會議の招待狀を出すことありとせば、我が全權大臣は之れが會長たらざるべからず、斯の時に當りて藩閥若くは大臣の女婿又たは情實に依りて實力なきに全權大臣と爲るが如きことあらば、愚はざるの失躰を顯はすの恐れあるなり、我が國民は今より之を注意せざるべからざるなり。

伯林會議は又た一の新例を出せり、ナポレオンが歐洲に覇たりし以來、外交上の用語は佛語を用ゐられたりき、英相ビーコンスフヰルド侯は佛語を善くせず、堂々たる大國の大宰相が殊に出席せるに當り、強て佛語を操らせんことは禮に非ずとし、伯林會議に於ては英語を用ゐることゝせり、是れより外交上の用語は漸く佛語より英語に移り、英米間漁獵問題に關する列國の仲裁會議には遂に英語を用ゐるに至れり、是れ畢竟伯林會議に起因するものなり。

歐洲大政治家會

(七)伯林會議の形勢

既にして伯林會議は開らけたり、ビスマーク之れが會長たり、英は首相ビーコンスフヰルド侯外相サールスベリー侯を全權とし露も亦た宰相ゴルチヤコフ會せり、墺は宰相アンドレツセー伯出で、凡そ歐洲の大政治家を一堂に集め、六月十三日に始まり、七月十三日に終り、玆に調印を行へり。

會議の形勢頗る面白し、露は將來ベルカン半島を占領する根據を造らんが爲めサンスステフアノ條約を締結せり、列國會議に於ては飽くまで之を維持せざるべからず。

英

英は兵力を用ふるに至るも之に抗せざるべからず、故に列國會議に先だちて密に露と約せる條件より押して、漸くサンスステフアノ條約を破り始めたり。

墺

墺は如何、ボスニヤは墺の界なり、彼れ土耳其に反すれば露之を取るべし、然るときは露は墺の境に接し來るべし、墺も亦たサンスステフアノ條約を破毀せざるべからず。

佛

佛は共和國なり、ベルガリヤが土國に反して獨立するに當り、其の實露の保護する所となり、五萬の露兵を二個年間も駐在せしむる如き、

新立國を專制國の下に置くは佛の國躰上忍びざる所なり、是れも亦たサンステファノ條約に反對す。

●伊は建國後、巴里の列國會議に始めて參同せり、當時國小力微にして、何等の發言をもなし得ざりき、伯林會議開かるゝに至り、國の位置を著しからしむるは斯の時なるを懷へり、然かするには數ケ國によりて反對せらるゝ條件には齊しく反對するを得策なりとしてサンステファノ條約に反對せり。

●土に至ては露に破られ孤城落日の勢となり眞に止むを得ずしてサンステファノ條約に調印したるものなり、土が露に反對するは言ふ迄もなし、

●獨は最も面白き位地なり、日清事件の際、露獨佛三國同盟の出來たるも畢竟伯林會議に於ける獨の位地に根ざせり、去らば伯林會議當時、

獨の形勢は如何、露は初め以爲へらく獨必ず露を援けんと、英、墺、佛、伊の列國、艮し我れに反對するも、會長ビスマークにして我れを贊成せば以て形勢を制するに足らん、且つビスマーク、よも我れに背かじと、ビスマークは一方には全權大使の資格を有し、一方には會長の位地を保つ、頗る重大の位置たり、而かも彼れは露を援けざりき。

當時の記錄に曰く、ビスマーク會長席より露を冷笑して云ふ、『露大使が各國大使に論究せらるゝは宛も鹿の獵犬に追はるゝが如し』と、米國のグランド將軍世界漫遊の途次、伯林に過きり、ビスマークを見て、伯林會議の事を問ふ、ビ對て云ふ、『露は露土戰爭に因り、物を呑むこと多きに過ぎ、消化し能ずして苦めり、予は之を吐かしめて彼れを援けたり』と、以て彼れが會長當日の心事を知るを得べし。

獨既に露を援けず、露は列國間に一の睨方を有せざるなり、ゴルチヤ

コフは之を見て、ベルガリヤの地圖を捲て本國に去らんとし、英のビ
ーコンスフヰルド亦た伯林を去らんとて臨時汽車を命じ、形勢太だ急
なり、去れど露竟に屈してサンスステファノ條約は破毀し去られ畢んぬ、

露屈す

戰爭に勝つも外交に破る

獨逸より割出せる歐洲の外交

（一）露、獨を怨む

嗚呼露國は失敗せり、戰爭に勝つも外交に敗れたり。百戰の山河空しく列國に取り還へされたり、是に於て乎、彼れは頻りに獨を怨めり。」露の戰勝の結果を水泡に歸せしめたるは英にあらずや、而かも露は寧ろ獨を怨めり、蓋しビスマークが伯林會議に於て露を援けざりしが爲めに、外交上の失敗を來たしたればなり、斯る會議に露が出席するは頗る解すべからずとするものありと雖も、露は實に獨の己れを援くるを信じ、外交に敗れざるを打算したるなり、ゴルチヤコフの如きは眞に斯く考へたり、而かも是れ彼れの空想に非ず。

露の打算違ふ

（二）獨佛戰爭に於ける露國

是より先き、千八百五十三年、佛英土三國聯合して露國を攻め、クリミヤに戰ひ、セバストポールを破れり、千戈相連ぬる三年にして露遂に敗れたり、列國會議は巴里に開かれ、セバストポールの軍港は壞つことゝなり、軍艦を黒海に浮ぶることを禁ぜらる、當時露國の意、單に英土聯合に止まらば敗を取らざるべかりしを、必竟佛の聯合に加はるありてセバストポールを破られたるなり、嗚呼佛國なるかな、一たびは譬を佛に復せざるべからずと。露は千八百五十六年に斯く決心して其の機の到るを待てり、千八百七十年西班牙の王位繼承問題よりして獨佛戰爭は起れり、露は窃かに機到れりとし、獨佛宣戰の布告せら

露クリミヤに敗る

佛に怨あり

獨佛戰爭

る、に先きだつ二日、露相ゴルチヤコフ伯林に至りビスマークを見て曰く、請ふ獨逸兵を以て佛國を蹂躙し去れ、露決して獨の背後を窺はじ、宜しく安んじて全力を佛國に注げ、是れクリミヤの戰に方り、獨が能く中立を守りしに酬ゆる所以なるのみならず、露も亦た佛に怨あり、露のクリミヤに敗れし所以のものは實に佛の敵に加はりしに因る、爾來斯の讐を復せんと欲すること久し、今幸に貴國の手に藉て此の復讐を爲す、公等決して背後を慮る勿れ、且つ彼の墺國は、貴國の關心する所なるべし、我れ誓て彼れをして背後を窺はせざらしむ、但し露も亦一の要求あり軍艦を黒海に浮ぶるを禁ずるの條約を破毀するとと、露の東歐に於ける運動に容喙せざることと是れなりと、ビスマーク喜んで之を諾し、遂に佛と開戰せり。

獨既に後顧の患なし、全力を擧げて佛國に向ふ、セダンの捷は奏せら

る、露帝斯の報を聞き、祝宴を宮中に開らき且つ獨のモルトケ將軍に勳章を贈る等宛然自國の戰勝を賀するに異ならざりき、獨軍長驅して巴里城を圍み、巴里の危きこと旦夕に在り、斯の時に方り露相ゴルチヤコフ軍艦を黒海に浮ぶを禁ずるの巴里條約を取消すことを列國に照會す、一兩國の異議あり去れど支ふる能はざりき、露は遂にセバストポール敗後の條約を取消し去れり、セバストポールの復讐巴里攻圍中に成る、外交界今に至る迄之を稱賛せり。

獨竟に佛に克ちアルサス、ローレンの二州を取り、賃金五十億法を得、露以爲らく我れ若し獨の背後を窺はゞ彼れ寧んぞ斯の大勝を得んや、且つや墺國をして獨の背後を窺はしめざりしさへ亦た我れの力なり、獨必ず我れの德を忘れじと、伯林會議を開かんとするに至り、露の全權公使が獨の必ず己れを援けんと信ぜしは、獨は露の期の恩に報ずる

なるべしと信じたればなり、露は之を信じて伯林會議に出席せり、而かも至れば則ちビスマーク露を援けず、是に於て露の失敗を來たし、露是に由て獨の背恩を怒り且つ怨むこと深し。

(三)伯林會議後の露獨間

露は獨の忘恩の爲に、戰に勝つも外交に敗れ深く獨を怨めり、後ち竟に獨が露と同盟して、露佛獨の三國同盟を形ち造り、露國をして戰ひに勝てる日本との外交に容易に勝たしめたるの因緣玆に存するなり。

サラ露國は伯林會議以來頻りに獨を憎めり、又た露相ゴルチヤコフが斯の如き結果に至ることを豫知せずして、戰勝の結果空しく列國に破毀せられたるを以て、大に露國軍隊の激怒を招けり。軍隊の折合六つかしくなれり、ゴルチヤコフ終生の失策となり、彼れ自身も快々として終に病ひを發せり。露土戰爭間終始外交の衝に當りしイグナチー

フも亦た政治社會に出つる顏を失せり、當時倫敦駐劄大使として英相と密約せしシウベローフも其の職に在ること能はずして外交社會より退けり、露國は官民を擧げて、戰に勝つも外交に敗れたるを遺恨とせり、故に伯林會議散ずるや、ゴルチヤコフ、イグナチーフ等、首唱となり、第一に「スラブ」人種膨脹主義の一會を組織し、獨逸に酬ゐる所あらんとし、全國の民を敎導することを勉めり。尊てペルチック沿岸露領に、獨逸人の多く住めるものあり、之に對して露國的制度を布き、又た獨境に向て軍隊を進め、豐に乘じて獨逸を衝くの形勢を顯せり、是れ固より外交的運動にして、當時露帝は書を獨帝に贈て云ふ、『千八百七十一年獨佛戰爭の當時、貴國と我國との間に約せる處は、伯林會議に於て貴國宰相の爲めに破られたり、故に露がコンスタンチノープルを取るは獨都伯林に於てせん』と是れ先づ獨を伐ち、而かして後ち

露相伯林を過る

外交強硬

土都を取らんと言ふなり、次に曰ふ『露軍がコンスタンチノープルに入るの道は、多腦河を渡らず、ダアダネルス海峽に由らず、テームス河も渡らず、猶は佛都巴里を流るゝセン河も渡らず、實にスプレー河を渡りて土耳其に入らん』と。スプレー河は獨都伯林を流るゝ水なり、亦た是れ露は獨と決戰して土耳其問題を決せんと言ふなり、此書は露國人心を代表するものにして、外交上有名なる書類の一なり、列國間の外交は斯くの如く強硬ならざるべからずして、露國が如何に、伯林會議の恥辱を憤り、獨に酬ゆんとするかを察するに足るなり。

（四）伯林會議後の露佛間

斯くてゴルチャコフは憂憤の餘、身躰衰弱せるを以て、千八百七十九年十二月佛國の近境なる温泉へ赴けり、逸伯林を通過せしとも、ビスマークに遭はず、一葉の名刺すら投ぜずして去れり、而かも其溫

露佛聯合

東西合擊

ビスマーク形勢に恐る

泉場へ達するや、佛國の新聞記者を招き、『佛國は實に好意を以て露に對するの國なり、佛國は戰敗の餘、實に憫れむべき位置に在り、是れ世界の文明進歩の爲に不利なり、如かず將來佛露提携して、力を世界の文化を進むることに竭さん』と記せしむるに至れり、加ふるに露國貴族は頻に巴里に遊び、巴里の貴族、若くは當局者と交を結び、露佛間の關係を親密ならしめ、而かして漸く東西より獨逸を合擊することに合意し初めたり、蓋し露は伯林會議の恥辱を雪がんとを欲し、佛は大敗してアルサス、ローレンの二州と五十億の償金を取られたる終天の讐を報ぜんと欲すればなり、斯くの如く露佛兩國の聯合を來たす、是れ伯林會議の結果なり。

（五）獨墺伊の三國同盟

露佛聯合して東西より獨逸に迫る、ビスマーク斯の形勢に勝ゆる能は

獨墺唇齒

獨墺の聯合成る

伊國の向背

佛伊離間

三國同盟成る

ず、千八百七十九年即ち我が明治十二年九月、墺國に至て宰相アンドレッセー伯を見て、之に言て曰く、東西敵を受け獨太だ危し、獨若し破るれば墺も亦た危からん、如かず互に同盟して露を防がんにはと、是に於て獨墺の聯合成る、然るに墺國及び瑞典、佛蘭西の南に伊太利國あり、當時此の國は太だ歐洲の形勢に樞要なる位置を占め、伊國にして若し露佛の同盟に入らんか、獨墺如何に強猛に念ふと雖ども之に敵することを能はざるなり、伊國の向背は獨墺同盟の勝敗の決する處なり、故に獨墺同盟も、露佛同盟も、雙方より頻りに伊太利に注目せり、抑も佛伊兩國民は同く羅馬舊教を奉じ、同く羅甸人種に屬す、故に兩國親密なり易くして、動もすれば同盟せんとするの色あり、非常なる外交の手腕を有せるビスマークは、外交政策を以て佛伊の間を離間して、伊をして獨墺の同盟に加はらしめたり、是に於て平三國同盟成れり、

英サイプラスを取る

(六)ビスマークの外交政策

ビスマークは如何にして佛伊の間を離間せる、蓋し初め伯林會議の時に於て、露がバルカン半島を下り該半島を占領することは遲り得たれども、去れど尚ほ慮るべきはダーダネルス地峽を經て地中海に突出することなり、斯くて英國は一方には伯林會議を開きながら、一方には土耳其と談判し、露が小亞細亞に由て地中海に出で來る道に當れるサイプラス島を土國より讓受くる條約を訂結して之れを取れり、佛の全權大使ワディントン之れを聽き、這は安からぬ事かな、英之を取るに於ては佛の小亞細亞に對する勢力は削られ了るべしと、之に由てサイプラス讓受けの異議を申出せり、英相ビーコンスフヰルド窃に佛國に告げて曰く、願はくば默して英のサイプラス島を取るに任かせよ、佛の亞非利加北岸なるチユニスを占領する時に當り、英亦た默して敢て反對すま

伊相明瞭

佛離間に陷る

むと、英佛の密約茲に成れり、ビスマーク之を知れり、獨墺を以て露佛に對し、而かして伊太利をして獨墺に加はらしめざるべからざるに至り、彼れは伊國に言て曰く、『佛若しチユニスを取るも、英は之に異議を言はじとは英佛間の密約する所なり、故に伊太利にして油斷するに於ては、佛必らずチユニスを取らん、然るときは地中海に於ける伊太利の勢力地に墜ちん、如かず伊國先づ之を取らんには』と、伊相はビスマークの離間なるを知れり、故に厚意を謝して敢て其の言に從はず、ビスマーク黨の成らさるを見て、轉じて佛國に向へり而かして之に告げて曰く『佛若し速にチユニスを取らずんば恐らく伊に取られん』と、佛國は念へり若し伊國にチユニスを占領せらるゝときは其の地中海に於ける二百年間の勢力を失墜すと、故に千八百八十五年即ち明治十八年、佛遂にチユニスを占領せり、之を觀る伊太利の人心頗る

激昂し、佛を背き、且つビスマークに懸合ひ、列國會議に附せんとす、ビスマークは斯の問題は歐洲全躰の問題に關係を有せずと言て同意せず、遂に伊太利は全く孤立せり、是に於てビスマークの離間策茲に成れり、伊太利は全く孤立せり、是に於てビスマーク徐ろに伊太利に告げて曰く『貴國歐洲の南邊に孤立ずるは頗る危し、如かず獨墺の同盟に加はらんには』と、伊は止むを得ずして之に隨ひ、獨墺伊の同盟遂に成れり、獨墺伊の三國同盟を以て露佛の二國同盟に對す、國勢茲に平均して歐洲の天地少焉靜謐なり。

（七）蕃三國同盟の危機新三國同盟の發生

獨墺伊の三國同盟の期限も千八百九十三年に終れり、三國は猶六个年間繼續を約せり、然れども三國は最早此の同盟に勝へずなりき、蓋し佛國にして兵を增さゞれば、獨も亦た增さゞるべからず、露軍備を擴張せ

ば、墺伊も亦た擴張せざるべからず、歐羅巴全洲國として軍備を擴張せざるはなく、各々有る限りの國財を費せり、是に於て平各々國用窮し、伊太利先づ財政の破綻を來たし、尋て墺地利の財亦た枯竭し、獨逸も亦た財政困難を訴ふるに至れり、財政既に窮す、兵豈に獨り精銳ならんや、幾十萬の兵備も其名のみならんとせり、斯くの如くにして三國同盟は漸く勢力を失し來り、伊太利の如きは獨國よりして、兵の多からんより寧ろ精銳なるを造れと忠告せらるゝに至れり。

獨は三國同盟の既に恃むべからざるを曉り始めたり、一方露は財政を整理し、前大藏大臣財政の方針を定め、紙幣を整理せしのみならず、今や銀貨を整理して、金貨本位となすの準備整頓し、歲入は歲出に超過し、其の國勢いよ〳〵三國同盟を壓するに至れり、形勢切迫獨逸いよ〳〵憂慮に堪へざるなれり、恰も好し明治二十七年即ち千八百

九十四年清東に於て日清兩國開戰せり、日本は遂に露國東洋政策の根本とも云ふべき滿州に手を着けたり、即ち日本は朝鮮に兵を置て之を保護し、奉天省の南部は之を占領せり、翌明治二十八年即ち千八百九十五年に至りては、日本は奉天省の南部を清國より割取する報、歐洲に傳はりぬ、是に至て露の東洋政策は根本よりして日本に破壞せらるゝの觀あり、露は實に大切なる場合となれり、去れど日本の連戰連勝せる兵鋒に對し、露の一國を以ては干渉し難く見へたり、事實露の陸海軍將官會議に於て露の一國を以て日本を制すべからずと議決せり。

獨逸は機會を覬めり、露佛二國同盟が東西より壓迫し來る危急の形勢は、到底歐洲に於ける問題、列國に直接の利害を被むる所の歐洲の問題を以て緩和せんことを極めて難し、歐洲の形勢を緩めんには、如かず

絶東問題を以て歐洲形勢の緩和を緩む

新三國同盟成る

獨の策は一時成功せりき

歐洲に直接の利害得失なき處の絶東問題を提らへ來りて、露の甘心を得んには、且つ獨は獨佛戰爭に際し露の東洋運動に反對せざる約あり、是れ以て利用すべきなりと獨先づ露に對し同盟して遼東問題に干渉せんことを申出でたり、露豈に躊躇せんや、直ちに諾し、且つ之を佛國に通ぜり、佛之を觀て露獨同盟の結果佛の孤立せんことを恐れ、亦た進んで一致せり、是に於て乎露佛獨の新三國同盟成る。

英國を目的とする歐洲の外交

(一)新三國同盟の眞目的

獨の露と結んで日本の遼東問題に干渉し、以て露の甘心を得んとするや、其結果或は露佛を離間し、獨も亦た埃伊を棄て、露獨二國同盟を形造くるを得んとの望なきにあらざりき、然れども佛も亦た油斷せざ

離間行はれざるも三國同盟となる

るなり、露獨同盟して佛國孤立となるの曉は佛危し、之を以て佛は獨の離間策に乘せられず、一歩を進めて露佛の親密を增すことを勉めたり、故に初め日清開戰に當り獨り日本に好意を表し、密に彈藥などを送り居たるものも今は止むを得ずして日本に反對し遼東還附を勸告して、獨の離間當時よりも一層露佛の間を親密ならしむる樣整れり。

獨の露佛離間策は行はれざりしも、露佛獨の新三國同盟は成就したり、獨が伯林會議よりして露に怨まれ、獨佛戰爭よりして佛に怨まれ、此露佛二國の壓迫に堪へずして講ぜる緩和策たる遼東問題干渉は、露佛獨の三國同盟として顯はれぬ、或は不俱戴天の佛獨が同盟せるは疑訝に堪へずといふものありと雖も、若し露獨同盟し、佛孤立せば如何、是れ前に述ぶる如く佛の進んで三國同盟を形ち造りし所以なり。

今や遼東還附問題は結了したり、新三國同盟も茲に終りを告ぐべき歟、

一問題存す

英國の位置

新三國同盟は排英を目的とす

英の教唆

對英同盟

元來新三國同盟は歐洲大陸の形勢のみに由て生ぜしにあらず、猶は一の問題存するなり、乃ち世界に於ける英國の位置是れなり、露佛獨の三國は相同盟して、東洋の日本に干渉せりと謂ふと雖も、新三國同盟の眞の目的は英國に在り、即ち英が世界に跋扈するを排せんとす、是れ新三國同盟の眞の目的なり、予は之を某國公使に聞く、佛は遼東事件を以て英と衝突し、獨は亞非利加及殖民地問題を以て英と衝突し、露は南下して東洋に英と衝突しつゝあるなり、露の考にては日本の遼東半島を取るは英の敎唆に出つと云ふに在り、這は是れ獨り露のみならさるなり、英は日本が遼東半島を取るに於ては露國南下の路を遮斷するを以て自國に利あり、之を以て日本を敎唆したりとは列國當路者の考なり、故に新三國の密約は其の實、對英同盟にして、英若し地中海及殖民地問題に就て露に反對せば獨佛必ら露を援け、英若し阿非利加及殖民地問題に就て獨に衝突せば露獨必ず佛を援けんと、是れ新三國同盟の奇態を顯出せし所以なり。

英國外交の位置

島國

(二)露佛獨に對する英國の位置

去らば英國は平素歐洲の外交上如何なる位置を有するか、是れ該國外交の上に有する點は地理上に在て、其の大陸に離れたる島國なる處、最も關係を有するなり、固より英も曾て歐洲大陸に領地を有したりき、去れど是れは棄て去りたり、歐洲大陸に於ては英は單に最富なる島國として觀られ、而かして亞米利加、印度、濠洲、阿非利加、及東洋諸島に領地を有し而かして今日の大英國を爲せり、然るに濠洲は曾ぴく指き、其印度を有し、亞米利加を有するや、初より英の殖民

地として自から之を拓き、且つ諸國に先鞭を着けて之を有せしやと探究するに概ね皆な然らざるなり、大抵他國が先達て有し居たるものを畧取したるものなり殊に佛國の有せる土地を取りたるもの多し。

(三)印度及北米大陸に於ける英佛

久しひかな、英の怨みを佛に買ふこと、夫れ歐人の印度に至るもの葡萄牙人を初めとし、和蘭人之に次ぎ、英佛また之に次げり、特に佛人は尤勢力を印度に占めたり、然るに英人が漸く競爭の色あるを見て、佛人は印度の土民若くは其酋長を煽動して英人を印度より排斥せんと企てり、此の時に方り英國東印度會社々長に一人物あり、英首相ピットの外交政策に長ぜる、善く之を用ゐて印度政策を行へり、有名なるクライブ是れなり、是れよりブラッセー、其他の戰に克ち佛人を印度より排斥して、漸く境土を擴げ遂に今日の如く印度を保つに至れり、」

佛人既に印度を英國に奪はる、是れ佛人終天の恨にして、其後奈翁一世佛國に生れ、印度を回復して讐を英國に復する、是れ彼れが重もなる目的にして、其埃及を征し、且つ小亞細亞に由て印度を衝かんとの計畫を爲したるも、畢竟此の復讐に在るなり。

亞米利加は西班牙人和蘭人等に依て發見せられ、土を拓き交易を開らかれたり、佛人亦た隨て此大陸に航し、特に加奈太に殖民して其基礎を固めたり、然るに英國は之に後くれて殖民しながら、佛人を排斥して又た亞米利加を奪へり、佛人が初め加奈太を占めたる證は今日も猶ほ其の南部に佛人種多きを以て之を知るべきなり、今日の合衆國も亦た一たびは英の佛より奪ひし處なり、亦た是れ佛人終天の恨なり、合衆國民が英に反して獨立せんとするに方り、佛人が之を援けたるも、多少復讐的に之を援けたる姿なきにあらず。

前世紀に於ける英佛の間は斯くの如き歴史を有せるなり、今世紀に入りてもなほ前後に於て奈翁一世佛國に出で、一方には印度を取りて直接に復讐し、一方には亞米利加に於ける復讐に英國を制せんとし、先づ歐洲を蹂躙して殆んど英國を壓せんとするに至り、歐洲諸國は寧ろ英國と聯合し、ヴヲーターローに奈翁一世を破り、維也納會議に於て七個國の聯合成り歐洲諸國は故の如く國境を定めて安寧を保てり。

(四)東歐問題の起源

千八百十五年奈翁一世沒落の後千八百三十年頃までは歐洲の形勢頗る沈靜なりしと雖とも、一方に敵を失へば列國又競爭を始むるは勢ひの免かれざる所乎、就中殊に著しく現はれ來れる顯象は所謂●●●

英露反目

露國南下の基礎成る

(六)東歐に於ける英露

(い)英露衝突の始

英露反目の始は千八百三十三年にして東歐問題が全歐洲の問題となり
し起源も茲に在り、是れより英國が東歐のみならず中央其他の歐洲大
陸問題に對しても干渉を爲して妨害を試ることゝなれるなり、
却說千八百三十三年埃及の酋長マホメット、アリイ反して土耳其を侵
せり、露國之を見て土國と一の條約を訂結せり、「スケレシー」條約是
れなり、此條約に依るときは、埃及軍若し土都コンスタンチノープル
を侵かさばコンスタンチノープルを保護する爲には露兵を土都に入る
ゝを許諾せり、於是乎、露國南下の基礎成りて、露國太だ得意なり。」
千八百四十年埃及の酋長再び土耳其に反せり、此の時に方りパーマア
スヽン英國に相たり、彼れ外交の局に當り、以爲らく土耳其の問題を

歐洲同等

露土條約破毀

妨害の嚆矢

露帝英に遊ぶ47

專ら露西亞に任せるは將來甚だ危險なり、元來露が土都コンスタンチ
ノープルに兵を入るゝの權を有するは歐洲の利害得失の爲めなりとし
て土耳其より讓られたるものなり、然らば則ち歐洲各國は皆露と同等
の權利を有すべきものなりと英は之を主張せり、是れが爲め露は露一
國のみコンスタンチノープルに兵を入れ得る權利を主張することを能は
ずなりぬ、露土間の條約は此に破毀されたり、加ふるに將來土耳其問
題は歐洲列國共に同等の權利を有することになれり、是れ英國が東歐
に於て露國に對し妨害を試むるの嚆矢なりき、是に於て英は露に怨ま
れたり。

(ろ)露帝猶ほ英に結ばんとせり

去れど露は猶ほ忍べり、千八百四十四年露帝ニコラスは英國に到れり、
蓋し土耳其問題は英と相約して彼れと議を協て處置するに如かずと考

へたればなり、其の英國に到るや、當時の英相アベデイン其他の當局者と謀て曰く、土國は其れ滅びんかな、果して然らんには將來英と露と土國を割取しては如何と、英相之に同意せり、露帝は英を以て承諾せるものと爲し、セント、ピータースボルグに於て英國大使シーモー卿氏に其條件を提出して曰く、土耳其將に滅びんとす、英露必らず此土を割取せん、是れが反對者は其れ佛國乎、果して然らば彼れは兩國の敵なり、且つ土耳其滅ぶるも其共和政治を此國に施すべからず、又た第三國をして土耳其を取らしむべからず、只だ土耳其を露の保護の下に置け、英國にして埃及及クリート等地中海中の島を占領するも、我れは異議を挿まじと、英は之を承諾するものゝ如くにして實は然らざるなり、露は英を以て異議なきものとし、今や反對者は佛のみと思へり、故に露は速に土耳其問題を決せんとの政策を執れり、

（は）露の對佛土方案

露の方案は是れなり、土耳其領の小亞細亞に耶蘇降誕の地あり、此の土地を露國の政權の下に置かん、露は希臘敎國なり、即ち耶蘇降誕の地を希臘敎保護の下に置かんとの問題を主張せば、羅馬舊敎國たる佛蘭西は必らず之に反對せん、是に於て佛國と一戰して土耳其を獲ん、又た土耳其に對する直接の問題は是れなり、希臘敎信徒及寺院を保護することは載せて「カイナヂー」條約に在り、土耳其をして此の條約を履行せしめん、此二方案に依りて露國は手を土耳其問題に下さんとせり、此方案にして行はるゝときは、佛と土とは敵となるも、英を味方として東歐に戰はん方略なりき、露の全權大使メンスコフは使命を帶びて土耳其と談判を開始せり、露樣猶ほ英は全く同意にして敵は佛のみなりと念ひ、英の爲めに盡らるゝことは毫も知らざりしなり。

英は露の味方にあらず

(に)英の表裏反覆

英の全權大使は土耳其に於ける形勢を見て、露佛間を離間する所の耶蘇降誕地保護問題を以て爭ふ件は英に好きも、希臘教徒及寺院保護問題を以て土耳其に干渉する條件を承諾するときは露國南下の基礎定るを識れり、故に英の全權大使は土耳其政府に告げて言ふ、『第一の耶蘇降誕地保護の件は承諾せらるべし第二の希臘教徒及寺院保護の件は承諾すべからず、若緩急あらば英國艦隊の武裝は整へり』と、土政府は英の已れを援くるを知れり、故に英の忠告に隨て第一條件を承諾し第二條件を拒絶せり、問題は面倒になれり、去れど露は猶ほ英を味方と想へり、維也納の會合は開かれたり、佛、墺、獨、英の全權大使は相會せり、露土兩國の讓歩し得らるゝ點を定めて提議せり、露是に至て初て英の己が味方に非ざるを知り、英佛兩國を敵とするの不利なるを

露土破裂

英佛土露と開戰す

念ひ、此の維也納會合に於て定めたる條件を承諾せり、然るに土耳其は英佛の後援あるを見て彼の條件を容れざりき、露土の間は破裂せり、露は直に兵をバルカン半島に進めたり、英、佛、墺はバルカン半島撤兵を露國に請求せり、露聽かず、千八百五十四年三月英遂に佛土と聯合して露國と開戰せり、之をセバストポールの戰若くはクリミヤの役と稱す、征戰凡そ三年にして露遂に敗れ、巴里會議開かれ、黑海に露艦を浮べることを禁ぜられ、且東歐問題は巴里會議に列席せる各國の承諾を經されば如何なる條約も無効なりとの條約まで露西亞に強ひられたり、露の英に對する怨は骨髓に徹せり、英が初め承諾せし如くにして、裏面に入りて土耳其に敎唆し遂に公然反對を表して我れに向て戰を挑む、露の英を怨むも亦た宜ならずや。

(七)波蘭土の分割

獨墺露三國が波蘭土を分割せんとするや、佛帝奈翁三世、歐洲に弱たらんと欲するを以て、英と聯合して波蘭土分割に對する外交策を試みんと欲すること切なり、如何に外交術を用ゐんか、先づ佛一國の力を以てしては之に干渉するに足らず、此の時に方りては英の聯合を要するなり、是を以て奈翁三世は、斯の波蘭土問題を、是非歐洲の列國會議にかけ處分せざるべからずとの外交策を畫し、之を英に申込めり、英は佛と同盟してセバストポールの戰ひを闘ひながら、波蘭土は歐洲大陸の内部に在りて、英とは利害得失の相關係するものなき土地なるを以つて、奈翁三世の申込を容れざりき、英の政策は常に斯くの如し、之れを以つて奈翁三世は波蘭土分割に干渉すること能はず、波蘭土は看す〳〵獨墺露の三國に分割せられ了り、奈翁三世が歐洲の政策に干渉して覇を一世に爲さんとしたる者の行なはれざるのみならず、

歐洲に於ける勢力は大に下降せり、之れを以て佛は英の情なきを怨めり。

(八) シュリスビグフオルスタイン問題

シュリスビグフオルスタインは從來丁抹に屬せる處なり、其の丁抹より分離せんとするや、墺獨兩國は兵力を以て丁抹と爭へり、然るに英はこれと直接の關係あり、之を以て英、若し墺獨と戰はんと欲せば、英も亦た兵力を以て共に此問題を決することを爲ん』と、奈翁三世前年英が波蘭土分割問題を共にせずして今自己の利害得失に關係ある問題を以てしては相共に兵力を用ゐんと云ふを憎み斷然拒絶せり、シュリスビグフオルスタイン問題は墺獨兩國の間に決し去る、白耳義問題の如き、佛は自ら之を占領せんとし、英は中立地とせり、要するに英國は自己の利害に關係ある土地には干渉す

仲裁中込三回

第一回

第二回

るも關係なき土地には手を斂むるの外交政策なり。

（九）獨佛戰爭に對する英國

獨佛戰爭に於ける英國の位置は如何、英が獨に對して仲裁を申込めること前後三回なり。

第一回に於てビスマーク之に答て曰く、『充分の條件を持ち出し、佛之を聽かば仲裁を容れん、去れど佛の聽かざるを奈何せん。

第二回に於て、斯時佛は列國に訴へたるなり、之を以て英は獨佛の間に充分の仲裁を試みんとせしなり、ビスマーク答へて曰く、『今仲裁を唱ふるは却て佛人を殘ぶなり、佛國民をして列國仲裁あるを恃ましめば、戰爭の局を結ぶこと長からん、然るときは佛人必ず苦しむべし、寧ろ獨佛兩國に放任して其勝敗を速かならしむるに如かんや、佛人をして仲裁を恃ましむるは却て彼れに害あり』と。

第三回

獨の決心

戰を開く者の打算

三回に止らず 55

第三回に於て、英の外務大臣グランベルは宛も獨軍進で巴里を圍む時に手を出せり、ビスマーク答へて曰く、『今や佛國を蹂躙する外あるべからず、仲裁と云ひ、列國會議と云ふ、何の効かあらん、唯巴里城を陷おるゝあるのみ』と。

獨佛戰爭に方り、英は三たび手を出し三たび拒絕せられたり、蓋獨の決心の堅きに因るなり、何を以て堅く決心したる、前に述ぶる如く開戰二日前に露相ゴルチャコフ伯林に來り、密にビスマークと約し、獨の背を襲はざるのみならず、猶ほ塊をして獨の背を襲はざらしめ、嚴正中立を守らしめたるに因るなり、夫れ一國と戰はんとするもの常に他國に對する是等の打算なくして、爭で光榮なる戰局を斂むるを得んや。

獨佛戰爭に方り、英の手を出したるは三回に止まらざるなり、前に述

べし如く、露國が黒海に於ける軍艦の制限を解かんことは年來の希望にして、獨佛戰爭に方り之を實行せんことは露の政策なり、故に露は

佛國の願ひ

獨のセダン戰勝の祝宴を開き、モルトケ將軍に勳章を贈て之を慶するに至れり、獨軍巴里城を圍むに至て、黒海軍艦制限を破毀するの通知を各國に發せり、英は之を見て其の國力を竭し佛土と三國聯合してセバストポールに戰ひし結果を、一枝の筆端を以て破毀されるを遺憾とし、獨佛戰爭中千八百七十一年倫敦に列國會議を開くことを申出せり、時に巴里は重圍の中に在り、故に佛國は委員を倫敦に送る能はざるなり、佛國は頻に獨逸に迫て委員を倫敦に送らんとせり、ビスマークは好政策家なりと謂ふべし、佛國はかずして之を止めり、ビスマークの容れざる爲め佛國は巴里の重倫敦の列國會議に於て、獨佛戰爭に干渉せんことを請ふ筈なりしなり、歷史家は、英の如きは暗に佛の此の情を察知して列國會議を開かんと

英國の失敗

英の慣手段

せしもの如く觀察せり、ビスマークの容れざる爲め佛國は巴里の重圍解くるまで委員を送る能はざりき。

斯く英の手を獨佛戰爭に出さんとせしものは悉く効なかりしが英國が歐洲大陸の問題には自ら容喙して妨害する國にして憎むべき國たりとは、此時よりして獨人の腦中に銘せらるゝことゝはなりぬ。

（十）露土戰爭に對する英國

千八百七十八年露土戰爭のことは前に述べたるが、此時に於ても英國は何處までも土耳其の後楯を爲すものゝ如くなりき、之を以て土は前のセバストポールの戰に於ける如く英國の應援を得るならんと信じ、露に對して强硬政策を執り遂に開戰に至れるなり、露土既に戰を開くに至り、英は土を援くる色なし、露軍既にコンスタンチノープルに迫るも英猶ほ動かず、土止むを得ず平和條約を結ぶに至り、英は徐

ろに容喙し始めたり。

曩に土軍敗北し首都コンスタンチノープルに迫らるゝや、英は露に忠告するに平和條約を結ばんことを以てしたり、露之を容れて平和條約即ちサンステファノ條約を訂結し了れば、英國は異議を容れたり。異議の結果は最初述べたる伯林會議となれり、サンステファノ條約は伯林會議に於て逐條審議せざれば列席し難しと主張しながら、窃に倫敦駐劄の露國大使と伯林會議に於ける議論の大要を約し、而かも伯林會議に於てはこれよりも大に踏み込めり。

若夫れ露に對しては巴里倫敦の列國會議に出席せしものゝ協賛を經ざれば露土條約は無効なりと主張しながら、英自身は其の間にサイプラス島を土耳其より譲り受くるの條約を訂結せり、若し露土條約を無効とせば英土條約も無効たらざるべからざる道理なり、而かも英は之を

爲す、故に英は不信、我儘の國として、露を初め歐洲大陸諸國より憎怨を受け居るなり。

（十一）露人英相を怨む切なり

今より三四年前、余は西比利亞の黒龍江沿岸州を漫遊せり、時に彼の露土戰爭に從軍せし人にして今總督府の秘書官たる人に邂逅せり、余が彼れに招かれて食卓を與にせる時、牛肉の料理を供せらる、秘書官は肉を切りながら笑て余に語て曰く、余は牛肉を最も嫌へり、何となれば牛肉は英語「ビーフ」にしてオルドとビなる頭字を同ふすればなりと、以て外交失敗の遺恨が如何に深く當時從軍者の腦髓に浸入し居るかに驚けり、亦た英人に對する露人の感情を知るべきなり。

（十二）東歐問題に對する英國

露人は猶ほ一個の英人を憎むものあるなり、伯林會議に於て英は露がベルガリヤ國を大にするを破りて之を二分してベルガリヤと東ルーメニヤとを建て以て、露人が同人種同宗教國を利用してバルガン半島を掩有するの基礎を妨げたり、然るに豫想に反してバルガリヤは同人種同宗教に拘らず頗る露に反對し始めたり、故に千八百八十六年英國は寧ろベルガリヤとルーメニヤとを合同して露國の南下を遮ぎる城壁となすの政策を執れり、此に至て露は却て英に反對して合同に反對したり、此合同は英のみならで墺國其他も聯合したることなりとは云へ、英國が常に自己に利あることは忽ち手を入れ、自己に利あらざることは必ず反對する是れ列國の憎む所なるが、英が強大なる海軍を有し、歐洲の覇權を握るを以て敢て抗するものなかりしなり。

（十三）スエス運河に關する英佛

スエス運河は佛蘭西のレセップス氏の發起せる所ろなり、當時の英宰相パアマーストン公は之に反對して其の計畫を贊成せざりき、而かもレセップス氏はスエスの地峽を開鑿して運河の開通を立派に成効せり、是に至りて英國は大にスエス運河の株式を買收し、埃及に於ける英の利益を保護すと稱し、兵を遣はして埃及を押へ遂にスエス運河を扼し去れり、之を觀て佛は倍々英に遺恨を懷くに至れり、

（十四）英の表裏反覆

英の對歐洲大陸政策は、常に全く自己の利害を標準とし、且つ動もすれば歐洲大陸諸國の政策を妨害し、歐洲大陸の權勢を保たんと欲する諸國をして苦心大方ならざらしむるなり、前に述べし如く獨墺伊の三國同盟は千八百九十三年に以て滿期となれり、爾後の形勢は如何、歐洲大陸に於ては、其の聯鎖の如何は、治亂の由て分るゝ所なりとして、

英國冷々と三國同盟を好遇す

佛艦隊を歡迎す

三國怒ると英の方向不分明

戰々兢々の底に之を觀望せり、此の時に當り英國は冷々として局外より之を觀來り、佛露同盟の較々強力なるを見るや、少しく手を獨墺伊の三國同盟に出し、伊太利太子を非常に歡迎し、獨逸皇帝を歡迎し、如何にも一脚を三國同盟に投じたるかの如くなり、之を觀る佛國は艦隊を露國に送り、佛露同盟して從來防禦的なりしもの攻擊的の姿勢に變ぜんとせり、英は默して之を觀望せしが、遂に佛の艦隊に招待狀を送て曰ふ、『貴艦隊露國よりの歸途、英の海峽を通過せらるべし、乞ふ我がプリマウスの軍港に寄航せよ』と、既にして佛艦隊到る、英の之を歡迎すること太だ盛んなり、遂に軍事の秘密をも之を示すに至る、獨墺伊の三國同盟は之れを觀て英が露佛同盟に隻脚を投じたるかを疑ひ、獨帝の如きは英の擧動を怒り、『歐洲亂るゝも其罪我に非ずして英に在り』と言ふに至れり、英の方向は實に不分明なり、英は如何に考

白紙に墨を塗せるのみ

へ居るか、英相サリスベリー侯は哂て云ふ、『歐洲大陸には、三國同盟と云ひ、二國同盟と云ひ、各々之を恃みて國勢を維持せんとするも、是れ只だ白紙に墨を塗抹したるものゝみ、歐洲の形勢何かあらん』と、彼れが是れ等同盟に對する頗る冷眼なり、是を以て、三國同盟も、二國同盟も、英の鼻息を窺はざれば、事を成すことを得ざりき、是れ英が常に對歐洲政策として執りし所の位置なり、而かも是れ歐洲大陸の凡べての諸國よりして憎怨を受けし所以なり。

東洋に於ける歐洲の外交

（一）日清戰爭に對する英國

英國の對歐洲大陸の位置は既に述べ來れるが如し、歐洲大陸諸國は英國を憎厭すること頗る切なり、現に少しく事を成さんと欲すれば、英

日清事件起る

英の狀態

英の對日清事件不決定なり

自由黨內閣

の迫まる所となり、我が利は彼れに妨げられ、彼れに利害の關係なければ寸毫の援助をも與へざるなり、露、獨、佛、各々此の情を同ふせり、斯時に當りて日清事件は端なく絶東に起り來れり。

當時英國民及政府の狀態は如何、國民は財力智力に富めり、國力に至ては海軍は仍ほ有力なり、地中海に於て二國同盟若くは三國同盟に當るの力は或は有せざるべきも、兎に角地中海に於ても、東洋に於ても、英國海軍は有力なるものと認めざるべからず、此の智富の國民にして國力仍ほ強大なる英にして、日清事件起るに方りては、英の政策は如何にも截然たる所を欠げり、蓋し英が其の曖昧にして不決斷なる政策を執りし所以のものは、當時の政府の立ち場に於て止むを得ざるものあるなり、請ふ政府の立ち場とせる基礎を觀察せよ、當時英の內閣は所謂自由黨內閣なりしにあらずや、而かも其の內閣は首相ローズベリー卿が自から組織せる所の內閣にあらずして、彼の老偉人グラッドストーン氏が自から政綱を立て之を撰擧區に訴へ、其の政綱に據り組織せる內閣にして、其の政綱は即ちアイルランド自治案なり、而かして撰擧は爭はれたるが、アイルランドの撰擧人は此の政綱の爲め、自治案を贊成せり、去れど蘇格蘭、ウエルス、英蘭の撰擧區民は反對者多かりし、故に自由黨は蘇格蘭ウエルス英蘭の自由黨員のみにては多數を制すること能はざるなり、彼のアイルランドの自治案贊成者を加へて、僅かに漸く十五六票の多數を得るに過ぎざるなり、ローズベリー內閣なるものは斯る基礎の上に立ち居れり、立憲政躰の國、殊に責任內閣の國に於ては多數を有せざる、十四五票の多數を有する位の內閣に於ては、截然たる、斷乎たる事は爲し能はざるなり、若し五十或は六十の多數を有するときは充分踏切たる事を成すを得ると雖ども、十

僅かの多數にては事を成し難し

自由黨と保守黨の性質

中等以下のものは職を失ふ

五六票の多數を以てしては迚も斷乎たることは爲し得ざるなり、況んや當時英の自由黨内閣なるものは、僅かに十五六票の多數なる上、其の中の幾十票はアイルランド黨にして自由黨自己本來の黨派に非ず。其の勝てる所以は惟一のアイルランド自治案に在るのみ、之を以て外交上の働きを爲し得ざるを奈何せん。

猶ほ英の國民中、自由黨なるものは保守黨とは其の撰擧民を異にせり、自由黨撰擧人の多數は實に中等以下の職人なり、保守黨は財産あり、智識ある中等以上の人多し、但し自由黨もアイルランド自治案の爲めに分離せる統一派には資產家も多かりしが、要するに自由黨の撰擧人は中等以下の種類の人なるを以て、戰爭一たび開くときは商工業上に影響を及ぼし、開戰即日より職を失ふもの多し、殊にセバストポール即ちクリミヤ戰爭の時に。英は償金を受取らずして露と平和條約を結べり、故に戰爭の結果として國債の增殖せしこと非常に多し、是れと時を同ふしてコブデン、ブライト等自由貿易を唱へし諸氏此の戰爭に反對せしが、自由貿易派の英國に擴張せらるゝに及び非戰論も亦其の派の人々の腦髓に侵入す、是を以て自由黨は議論上戰爭に贊成せざるのみならず、實際上戰爭は商工業に直接の影響を及ぼし、即日糊口に窮するものを生ずるを以て、多くは戰爭を嫌忌せり、斯る撰擧人を後楯にする内閣は踏込んで外交政策を講ずること能はざるなり、故に成るべく双方に悪からぬ位の外交を爲すに過ぎざるなり、英の日清事件に對せしは實は斯る内情ありしなり。

双方悪しからぬ樣

他も同主義

(二)英の對亞細亞政策

英の外交が優柔不斷なることは、獨り日本に對してのみならず、他の亞細亞に對するも全く同主義なりき、手を下さんか、相手の强硬にて

兵端を開かざるべからざるに至るは吾が最も困む所、是れ自由黨政策の眞面目なり、今其の一例を示さんか、余は先年遷羅に遊べり、時恰も遷羅問題の發せる頃なりき、遷羅駐劄の英公使を初め英領事とも遷羅政府に告げて曰く、『佛に反對せよ、佛艦來襲せば、英必ず之を擊て遷羅を援けん』と、遷羅をして佛の軍艦を擊たしめたり、遷羅英の後援を信じて砲を佛に放てり、放てば則ち英援けず、英の考は事玆に至れば佛は手を遷羅より斂むるなるべしと謂ふに在りき、佛は手を斂めず、英の案外に出でたり、英の處置如何、曰く『遷羅駐劄公使領事の所爲は英の正式に訓令せる所にあらず』と、遷羅駐劄の公使及領事を して遂ひに更代せしめ、遷羅問題は佛の獨り解釋するに任せたり、英の日清事件に對するの筆法も亦た斯の如く、始めは强硬に日本に對し、多少不利益なることを爲すの政策なりしが如し。

英の案外

日本連勝後東洋事情を知る

英は日本に臺灣占領を勸む 69

(三)歐洲に於ける東洋事情

日清事件の發するや、歐洲諸國は實に東洋の事情に暗かりき、個は實に掩ふべからざる事實なり、英國の如きも、如何に日清事件の局を結ぶべきかは甚だ惑ふ所なりき、故に最初は探り見る位の度合なりしが如く、露、獨、米の列國は連合して仲裁せんとの議を爲さんとする如く、結局の見込は着かざりしが如し、日清開戰以來、日本の陸海軍連戰連勝の報知歐洲に達するに至り、東洋の事情初めて明白となり、以爲らく日本帝國侮るべからずと、是れより歐洲の外交は一變し來れり、殊に日清戰爭結局に至ては、英は頗る日本に好意を表し、日の臺灣を割取することは、反對せざるのみならず、寧ろ至當と認むることを言明せるもの、如し、英は滿州占領に反對せざるのみならず、臺灣占領に對しても、寧ろ早く斯の地を日本に於て押ふべしと言ふに至れり、

是を以て英の東洋政策は察せらるゝなり、勢の迫るを見れば手を斂め、支那に於ける最惠國條款に依て商業上の利益を得るを以つて滿足し居るものゝ如し。

（四）新三國同盟對英國

日清戰爭結局に於ける露、獨、佛は如何、露は勿論滿州及旅順威海衛を日本に取らるゝに於ては其の東洋政策の根本を破壞さるゝものにして、西比利亞鐵道を架設せる目的の根本を破毀せらるゝなり、故に飽迄之に反對せざるべからず、然るに其獨及佛の聯合を得ざるべからざる所以のものは、畢竟日本一國に對して兵力を比較したるにあらず、若し滿州占領に干渉するときは英國が露に反對せざるやを考へ、日英兩國の聯合軍を敵として戰ふの決心を以て、露、獨、佛、三國の同盟を必要とする打算を下だしたるなり、茲に至れば英は充分の位置を取ると甚だ難し是れ前に述べたる如き薄弱なる基礎の上に立てる內閣の組織にしては截然斷乎たる處分を爲す能はざるのみならず、日英同盟するときは、東洋に於ては露、獨、佛の三國に對し、充分の勝算あるべしと雖ども、地中海に於ての勝算は全くあらざるなり、佛が近頃ろ海軍を盛んにするや、英は佛一國に對してすら全勝を危ぶむ程なり、況んや獨の敵に加はるをや、去れば英は止むを得ず遙かに退て嚴正局外中立を立て通ほすことゝなせり、但し暗々裏には日本へ好意を表せり、英は將來對露政策上、東洋に於て日本を同盟國とせんとの策を執れるものゝ如し。

之を以て英の外交政策は見事なりと稱する人もあるべし、余の見る所を以てすれば英の外交策は英の國民としては失策と外、見へざるなり、所謂有形上の利益は餘り損ずる所あらざるべし、去れど無形上英が萬

國間に有せる勢力は之が爲に頗る下降せるものゝ如し、外交は一局部に於て、其位置を下降するときは全局に及ぶものなり、英が東洋に於ける位置上、己れの敵たる露をして傍若無人に働らかしめたることは、遂には佛は露獨と同盟を利用して埃及より英兵を撤去せしめ或はナイル河の沿岸を局外中立地とせざる可らざる條件を以て英國の政策を抑へんとし、其他外交上の問題と爲りし所は突込み來りて底止する所を知らざらんとし、己れの外交の敵とせる國は皆鋒を揃へて突き込み來るべきなり、之れを無形上英國の位置の降下せると謂ふなり、英は支那に於ては最惠國條款に依て商工業の利益を取り、日本を對露の城壁とする等、有形上餘り損する所なしと雖も無形上には大に損せり、是れ日清事件に對する英國の政策を失策なりとする所以なり。

(五)英の將來の東洋政策

英國は自由黨内閣倒れて保守黨内閣と爲れり、保守黨内閣の對日本政策は如何、余は其の必らず日本と堅く結ばんことを欲すと思考せり、且つ是れと同時に支那とも堅く結ぶとの政策に出づるなるべしと察せらる、事實上、平日の政策上よりして然るべしと思考す、英曾て巨文島を占領せしことあり、是れ自由黨内閣の時なりき、保守黨内閣の之に代るや最初の外交は之を放棄することとなりき、是れ支那の甘心を得て之と結ばんが爲めなり、之を抛棄するや只だ之を露に占領せしめずとの條件を附するに過ぎざりしなり、以て保守黨内閣の對支那策を察すべし、次に英の對日本政策の例は如何、日英條約改正は英の自由黨内閣の時に成れり、去れど實際は保守黨内閣の時殆んど成り居たるなり、故に其の成るは保守黨の政策に出でたるものなり、又余が英國に在るや、恰も保守黨内閣の時なりき、當時印度事務大臣ロード、ナツフオ

ルドが余に與へたる書簡中、斯の如き語あり、曰はく、將來東洋問題に就ては彼のピット、カンニングの國の政策（所謂露西亞南下に抗する英の政策）を參考とせられよ、余（ナツフオルド）の考を以てすれば、日本の日進月歩するの事實は實に喜ぶべきことにして、太平洋に於て起るべき大問題に就ては將來貴國（日本）と英國は同盟して事に從ふを得んと、是れナツフオルド氏一己の考と申しながら亦た保守黨政治家の重もなる人々の考なるを察すべからずや。

英の外交政策は一見我儘の如し、局部々々の外交に於ては或は取り或は棄て、變幻極まりなくして他國の甘心を損ふと雖ども、英の外交政策の全躰を觀察し來れば、其中に一道の大方針の始終貫徹したるものなくんばあるざるなり、取るも棄つるも要唯だ此の方針に適ふに在るのみ、英の外交政策の大方針は如何、東歐及び亞細亞洲に於て露の南下を防ぐの一原則是れなり、此の原則は百年不易にして、露の南下を防ぐ爲には或は取り或は棄つ、其の手段異なりと雖ども其の原則は寸毫も異ならず、是歷史上の事實なり。

日本將來の外交

今は日本將來の方針を定むべき時なり、日清戰爭は日本の世界に對する位地を一變したり、日本が東洋の一强國にして、將來東洋の覇權を握り、歐洲に迄關係を及ぼす有力の國たることを認め來れり。既に認める時は其の對日本政策を定めざるべからず、彼れ之を定むるときは我れ亦た對歐洲政策を定めざるべからず、所謂東洋の覇權を握り東洋の事は日本國主として之を處置するの義務も、日清戰爭よりして日本に歸し來れり、是を以て此の義務を果さんが爲めには外交

の方針を定めざるべからず、英を敵とするか味方とするか、露に對して遼東還附干渉の報復を爲す迄は之を敵とするか如何、獨佛に對しても矢張之を敵とするか如何、是れ日本が決せざるべからざることなり。

之を決するに當り一毫を誤まれば竟に千里の過となるべく、之れが方針にして其宜しきを得ば、日本は東洋に表出するのみならず、歐洲の權勢上有力の國たることは誤想ならずと信ずるなり、今日は第一日本の實力を養はざるべからず、一方に海陸軍を擴張し、一方に外國貿易工業商業を盛んにして富力を增加すること是れなり、然るに戰後我國民の氣燄揚らず、國民は頻りに前途を危めり、是れ外交當局者が外交の失策より來れるものにして、日本が連戰連勝の結果、外交上の失敗よりして、國民が將來の外交を危ぶむものなり、將來事毎に斯くの如

く失敗し、國民の奮發して成したるものを外交の當局者の爲に水泡に歸せしめられるかを危ぶむなり、今日の要先づ此の國民をして心を安んぜしめざるべからず、心を安んぜしむるには將來の外交上失策なきを確保せざるべからず、即ち戰ひ勝つも外交に失敗して水泡に歸せしめさる程の計畫を示さゝるべからず、然るときは國民も心を安んじて其の氣燄揚るべし、是れにあらずんば國勢の發達は大ならざるなり。

熟ら世界の前途を瞻察するに戰爭の機三あり、第一は歐洲に於いて獨墺伊三國同盟の期限の終了する時に在り、此の三國同盟は一千八百九十三年に終了せしものを六個年間延期せしを以て一千八百九十八年まで繼續せらるゝなり、即ち今より三年の後に在り、此同盟期限終了すれば、歐洲の形勢は更に一新せられざるべからず、露獨今日の關係は

維持せらるべきや、露佛の同盟は如何、獨、墺、伊の從來の三國同盟は尙ほ維持せらるべきや、是れ等合縱連衡の定まらざるべからず、今日の形勢の維持せらるゝと否、其の秤の如何に由て或は戰雲歐洲の天を蔽ふことを豫想しおかざるべからざるなり、歐洲亂るれば東洋獨り太平なる能はず、英露東洋に衝突するが如きことなしとも限らざるなり、此時に方り日本は屹然として東洋に其の位置を保つだけの準備あらざるべからざるなり。

第二は西比利亞鐵道全通の期なり、之を千九百年とすれば今より五ケ年後なり、此の鐵道の成功は露國の財政上之を許すや否や頗る危ぶまれたりと雖ども、露の財政の整理せられ紙幣は銀貨と爲り、銀貨は金貨と爲るの程度に至りしを察し、又歲入の歲出に超過するより見るときは、五ケ年間に成効することは疑ひなかるべし、或は此の鐵道は軍

事上に關係なしと論ずる人ありと雖ども、東洋の外交上注目すべきものを生じ來るは豫察しおかざるべからず、此鐵道全通の前後、如何なる變化の來るか、或は東洋の天地に開戰の不幸を見るの結果には至らざるか豫察すべからずや。

第三は日本の實力の充實是れなり、即ち富國强兵の實擧がり、東洋の覇權を實際に握るを得るの時なり、豫定の時日は恐らく是より十年ならんか、實力既に充實するときは、他國より觸着し來るや否に拘らず自から進んで亞細亞大陸最終の處分を爲さん考案なり、此時に至れば亞細亞の處分は日本の考ふ如くし、若し之に異議を言ふものあれば其國の大小を論せず、日本の實力を以て之を排斥せざるべからず、是れ又た今より準備せざるべからず。

斯の三時期は實に大切なる時機にして、日本が受働的に兵を動かすか、

或は自働的に兵を動かさゞるべからざる時期の來るとを覺悟せざるべからず、日本は此の際外交の方針、何の國は敵にして、何の國は味方たるかは、伯林會議に於ける露の外交の失策に依て略ぼ了解せらるべく、其の方針を定めざるべからず、一方には將來日本の商工業進歩して國利の衝突せるに方ては、何れの國を敵とするやの大方針を定め、一方に彼の三時期を考へ、其の度を計て軍備擴張と、富力增殖と、兩つながら大計畫を定て一時も早く着手せざるべからず、然らば則ち戰勝の結果として日本の位地進み、歐洲に對する位地尙ほ一層堅り、戰勝の結果を充分實行することを得るなるべし、外交上は外交官の人選も必要なり、在外公館の入費增加も必要なり、去れど一國外交の大方針にして確立せずんば外交を奈何せん、（外征進化の應用の二參看）大方針を確立し、其の準備を周到にし、只だ一局部を進むるの失計なく、

一國全躰の前途に向て大進歩を爲すに於ては、日本國民を擧げて望む所の世界に對し、東洋に對する日本國の位地を充分に固むることを得んか。

外征進化の大勢及其應用

總論

稲垣滿次郎述

茲に外征進化の大勢及其應用を說かんとす、外征の進化とは、畢竟世界の政治、社會、宗教、道德、及經濟の歴史、之を簡單に換言すれば、即ち世界文化（シヴィライゼーション）の歴史に就て、外征上の點より、單に觀察を下して世界の文明論を爲すものなり、倘ほ深く問題の區域を確限して之を言へば對外思想の歴史とも稱すべき者なり、茲に說かんとする目的は、對外思想——所謂外征の進化が、如何に變遷して、第十九世紀に至り、

如何に成り居るや、其の第十九世紀の外征進化の大勢（セニラルテンデンシー）、及び之を應用（アップリーケーション）することは是れ本論の主眼たり。

進化の定義

進化（エボリウション）とは何ぞ、苟も日本に流行せるスペンサア氏ダーウヰン氏の諸書を讀める人は夙に之を知れり、今更ら余の贅言を要せざるなり、去りながら定義は定義として一應説明せざるべからず、抑進化の大本は、第一單純（シンプル）なるものより複雑（デフエレンセーション）なるものに進むものなり、ダーウヰン氏をして之を言はしめば、人間も原は「トコロテン」の如き塊なりしもの、目鼻を生じ、手足を生じ、遂に精神まで生じ、男女の區別さへ生じて、今日の如き複雑のものとなれり、是れ一例とす可きなり、進化の大本となるべき今一つは、初め單一（センヂニー）の音より漸く數音に分る、其の分るゝもの各〻調子を合せて働らきゆく所の點あらざるべからず、此の二個の大躰の原則、即ち單純なるものより複雑に移り、單一なる音より調音（ハーモニー）となり、共に調子を合せて働らく樣になりゆく、是れ即ち進化の定義なり。

田賭、耳聽き、鼻嗅ぎ、口言ひ且つ食ひ、手舞ひ、足踏む、而かも其各部の働き箇〻別〻ならずして各〻其調子を合せて働らき、茲に初めて進化の原則に適ふなり。

今外征、所謂外國と戰ふと云ふ問題を進化の原則に適用するときは、先づ外征に入る前に方り、即ち上世に於ては、一二の人間が相互に打ち合ひ居、其の次は三人か四人打ち合ひ居、其の次は國内に於て百人相爭ひ相戰ひたるものにして、其の戰爭が進んで甲國なるもの他の乙國若くは丙丁國と戰ふに至り、即ち外征なるもの生ぜるなり、余が説かんとする所は、既に國を成せるもの他の國と戰ふに至れる、即ち外

征となりし時を起點として、余の問題を採らざるべからず。

外征進化の第一期——個人的功名心（パーソナルアムヒジョン）欲望より起る外征

外征進化の第一期　上世希臘羅馬を經て、羅馬帝國亡滅し、恰も第十六世紀の始までを以て第一期とするを得べし、此時代の外征の大目的とする所のものは如何、先づ一己人（パーソナル）の功名心（アムヒジョン）、所謂一己人の名譽欲望が主眼となりて歴史上に顯はれ居るなり、人間初代の單純なる世の中に於ては自己なるもの、如何にも先づ思ひ付きの基礎にせられ易きものと知らるゝなり、之を歴史に徴すれば着々其の例迹あるなり。

（甲）希臘時代

（一）希臘波斯戰爭

明治二十三年即ち西暦千八百九十年、余は東歐を漫遊して、希臘に至り、日本に於ては函嶺の嶮とも稱すべき、雅典府附近に於ける有名なるサウモーピヤヂ嶮隘の古戰場を訪へり、是れ上古希臘に於て四千の寡兵を以て、波斯數十萬の大軍と戰ひ、スパルタ國王レヲニダスが三百のスパルタ人を率ゐて波斯の大軍を喰止め、激戰して波斯人二萬を殺し、而かもスパルタ王レヲニダスも亦其部下三百人と共に戰死したる有名の古戰場なり、彼の勇敢なるスパルタ人の敎育は、英傑ライカルガスの敎本に則りたるものにして、勇士戰場に出るに臨み、其母、兒を誡めて曰く『爾は斯の楯上に載て歸れ、否られば則ち楯を持て歸れ』と、斯る敎育の裏に人と爲りし健兒の俠骨を曝せる古戰場を見了て、尙は海に浮び、セミストオークル氏が三百六十六艘の船を以て波斯の一千の兵船を破りたるサラミスの古戰場を觀、夫れより希臘の首府雅

典に遊び、アクロポリスの古趾に登り、歐羅巴文明の湧出せる泉源を追想し、大聖人ソクラチース氏が正義を守て幽閉せられし所の石牢に入り、轉た當年の辛酸を回想し、デモスゼニース氏が滿腔の熱血と懸河の雄辯とを以て雅典人に說きたる石の臺に上り、又一日、英國文學の一大碩學フレデリツキ、ハリソン翁を相携へて雅典府の後山に上り、世界十五大戰の一たるマラソンの古戰場を瞰めり、地形半月形を爲し、遙かにスパルタ半島を望めり、ロード、バイロンが古戰場を詠ぜる長篇を想起し、轉た感慨を深ふせり、時にハリソン翁余に言て曰く、『嗚呼奇なる哉、希臘と波斯との戰爭は西邦の文明と、東邦の文明（ライゼーション）との戰爭なりき、而かして今、極東（ファーイースト）なる日本より來れる貴君と、極西（ファーウエスト）なる倫敦より來れる予と、相倶に此の山上に立て、其の古戰場を見る、何等の奇緣ぞ』と、西洋の歷史家は、此マラソンの戰爭を評

して言ふ、『西洋の自由（リベーチー）と東洋の專制（デスポチスム）との戰爭なり、即ち歐羅巴の文明が東洋の專制（デスポチスム）に勝ちし所の古戰場なり』と、余を以て之を觀れば、西洋歷史家の誇評は未だ其當を得ざるものゝ如し、何となれば此紀元前に於る波斯國王の外征なるものが希臘の爲に挫折せられ、其結果は恰も歐羅巴の文明を破らざりしと雖ども、此外征の精神は波斯國王ダリヤスが歐羅巴の文明を破壞して東洋の專制（デスポチスム）を植てんとの目的なりしとは吾人の認めざる所なり、吾人は唯ダリヤスは其個人的功名心欲望の爲めに波斯より起て自己（パーソナル）の名譽欲望を遂げんと企てたるのみ、夫れ個人的功名心欲望を主とするときは、隣邦近國に向て兵馬を發し以て之を征服（コンクエスト）するときは、隣邦近國に向て兵馬を發し亦た然りしなり、ダリヤスが小亞細亞を征服するに方り、雅典人はアオニアに在る希臘人を援けんとし、徃てサアヂアスなる首府を圍み、

火を放て之を灰燼に歸せしめたり、波斯國王ダリヤスの精神は實に此の復讐に在りしなり、是を以てダリヤスは其侍從をして『我が君雅典を忘れ玉ふ勿れ』と言はしむること日に三回なりしなり、彼れの外征の目的は如何にしても己れと云ふもの土臺にして、所謂個人的功名心（パーソナルアムヒション）欲望の勃發に基つき以て鄰邦近國を併呑し之を征服するのみが目的となりて働きしものと外、見らるゝなり、當時未だ君主血統的功名心（ハアミリーアムヒション）若くは國家的功名心（ステートアムヒション）又若くは國民的功名心（ナショナルアムヒション）或は斯道の爲にするとか云ふ如き思想は發達し居らざりしと鑑定して錯誤なかるべし。

二十にして立つ

(二)歷山大王の遠征

次は希臘の歷山大王の遠征なり、彼れは齡二十にして父の遺業を繼ぎ、小亞細亞、埃及、波斯全部を征服し、遂に印度に出で、ハイファセス河の涯に深入し、是れより印度河に沿ふて印度洋に下り、其一艦隊に命じ印度洋を回航してユーフレット河に遡らしめ、彼れ自らは陸路バビロンに出で、三十三歳にして終に長逝せり。

歷山大王遠征の目的

却說歷山大王遠征の目的何處に在る乎、歷史を見るも明白ならず、之を識るに困難する事實なり、何の爲に印度を征せしや、何の爲に埃及に到れる、其結果は希臘語を擴げ希臘の文化を擴げしと雖とも、歷山大王の目的は恐らく是れに在らずして、其期する所は一身の功名に即ち名譽欲望に在り。即ち是れが土臺となりしものなり、歷山大王のパビロンに於て不豫なりしとき、重臣其床下に集り問ふて曰く、『陛下登遐の後、誰か大王の遺業を嗣ぐべきぞ』と、大王答て曰く『最强者に讓らん』と、是に由て之を觀れば當時家統（ファミリー）と云へる思想なし、如何にも自己は世界の最强者なりしを以て、之に嗣ぐものも世界の最强者を擇み之に讓らんとの思想を有せるものに相違なし、然らば則當時矢張

結果を以て目的をすべからず

最强者家統思想なし

印度埃及出征の由來

無爲以て王位を保つべからず

り己れと云ふことが主となり居りしにあらずや、又印度、埃及等に出征せし由來を見るに、大王の父フ井リップはマセドニヤより起りて希臘を一統せり、デモスセニズの雄辯善く雅典人を激勵するありと雖も、竟に抗する能はずして希臘は歷山大王の父の爲に征服せられたり、希臘の善後策容易ならず、無爲は王の位置を保つ所以にあらず、故に希臘の人心を外に向はしめて己の位置を保つ、是れ大王の父の遺策なり、歷山大王之を嗣げり、其の外征の餘り大なり心は勢に隨て爾りしのみ、然らば則歷山大王の外征も亦他なし、其個人的功名心欲望の爲に發動したるものたるや明かなり。

(乙)羅馬時代

(一)ポエツク戰爭

羅馬時代に移り、カルタゴ即ち亞非利加北岸の國(今のチユニス國)

百三十三年間戰爭

國家の一代を全ふす

思想不揃

羅馬人の心事

兩傑問答

と羅馬との戰は彼の有名なる「パニツク、ウオア」にして百三十三年間續けり、此外征の目的は何處に在りしかは最も歷史家の研究すべき所なり、何となれば羅馬國は初めは王國(キングドム)にして、一變して共和政治(レスプリツク)となり、再變して帝國(イムパイア)となり、所謂國家の一代(コムプリート、ライフ、オフ、ステート)を全ふせる國なり、故に非常に思想の不揃にして、一方に進み、一方は取後れて有る如き即ち時に於ける羅馬人の心事を見るに單にカーセージ國を亡滅せしめざるより、よりして、其歷史を觀察すること頗る難し、然れども「パニツク」戰爭當可らずと云ふに存せり、此外征の軍將は誰ぞ、カーセージ國の方にては彼の有名なる英傑ハニバルにして、羅馬の方は亦是英傑シピオなり、此兩傑の問答錄を見れば則此外征の目的の那邊に在る乎を解するを得るなり。

ハニバル晩年頗る落托、一日シピオに邂逅す、シピオ問ふて曰く『世

第一は歴山大王第二はパラス第三ハニバル自身

歴山大王以上の拙者

シーザーの心事

界開闢以降最勇將は誰ぞ』、ハニバル答へて曰く『歴山大王なる哉、世彼れに優る人なからん、寡兵を以て善く印度埃及――世界の大半を征伐す、誠に最勇の將ならずや』、又問ふ其次は如何、答へて曰く『羅馬のパラスなり、斯人の作戰は非凡なり、其次は誰ぞ、『次は自分（ハニバル）なり、夫れハニバルはシピオに破られしもの、故にシピオ笑て曰く『足下若し余に勝ちしとせば足下の位置は何處に定むべき乎』、ハニバル亦莞爾として答へて曰く、『然る時は歴山大王以上の拙者なり』と、是に由て之を推究するときは「パニック」戰爭の外征なるものは單に個人的功名心欲望の發作たることと明か也。

（二）シーザーの外征

一時代下り、羅馬の偉人シーザーの心事を解說し見るに、其時代の外征も仍ほ個人的功名心の欲望が主となり基となりて支配し居ることを知るに足るなり、シーザーは羅馬の大將としてライン河の北に出で、ブリトンを討ち、二回まで西班牙を征し、ゴールの總督となり、ゴールに出征するや、兵力を一握して終には羅馬の主人公と爲らんとの大志を抱くこと久し、故に一方には友人羅馬の大將なるポンペーに己れの一人娘を嫁して彼れと結べり、其の政界に雄飛せんとするや、忽ちポンペーと衝突し、終に兵力を以て羅馬の憲法制度を破り、ゴールより歸て政權を一握し、ポンペーを追征して埃及に到る、如何に豪傑シーザーも當時絶世の美人と稱せられし埃及の女王クレオパトラの艷色には鐵魂を蕩せり、是れシーザーのみならざるなり、後ち羅馬帝國のアントニーも此女王の爲め魂天外に飛ばされたり、シーザーは埃及より羅馬に歸り、中央集權的政策を執り、遂にブルテートル大元帥と稱し、其結果として親友ブルタスの刃に罹て落命せり、シーザーの精神

ホンペーと衝突

クレオパトラに迷ふ

大元帥

の在る所は言ふ迄もなしと雖も、シーザーの自白を見れば一層明確となるなり、彼れは埃及征服の次年、小亞細亞を征服せり、當時書を其友人に贈て曰く、『我が來りし處我が見し處は一として我れ之を克服せざるなし』と、見るべし彼れシーザーが常に自己を中心として外征を爲したる意の顯はれ居るを、又セキスピヤーは善くブルタスがシーザーを殺せる時の心事を描けり、ブルタスの演説に曰く、『シーザーは吾れを愛せり、豈に彼れの爲に涙なからんや、彼れ幸あれば吾れも共に喜び、彼れ勇氣を出せば吾れも常に彼れを稱揚せり、然れども我れは彼れの功名心野心的欲望に對しては彼れを殺したり』と、親友なるブルタスの斯の言より推し、又シーザー自白の語より察しても、其外征の目的は羅馬の文化を進め且之を世界に擴張すると云ふ如き高尚なることに非ずして、己れ一個人の功名心欲望を滿たすことを主眼とせることは明かなり。

（丙）手段（ミーンス）を以て目的（エンド）を誤認したる時代

（一）外征上に於ける宗教

歴史は是より初て面白くなれり、自個以外に於て人間が想像力を以て物を造ることの原素の加はり來りしは斯時以後に在り、這は日本の人には解し易からぬ問題なり、羅馬帝國を立つ、然かして羅馬に於てシーザー死してオクタビヤン帝位に即き初て羅馬帝國と爲せり、故に羅馬に首府を置くの必要なくなり、寧ろ敵國の近傍に首府を置くを適當とすと謂ふことになれり、斯くの如くにしてコンスタンチノープルに遷す、羅馬帝國は之が爲に二分せらる、一はオリヂンチン帝國、一は西部則ち羅甸帝國なり、而かして此オリヂンチン帝國の立てる際に於て、彼の世界の人心を支配

する所の彼の耶蘇基督なるもの顯出せり、耶蘇は小亞細亞に生れて耶蘇教を開き、自からは衆生濟度の爲とて十字架に上り、其弟子セントポール（ゴスペル）は教典を手にして小亞細亞より希臘に到り耶蘇教を擴布し始めたり、自己功名的欲望を以て他の國を征服する手段は從來武力なりき、然るに是れよりして宗教と云へる手段初て加はれり、當初羅馬帝王は耶蘇教に反對せり、コンスタン帝一日戰場に於て、十字架の空中に顯はるゝを見、且つ『之に依て打勝て』（ハイス、コンクエア）との神託を聽くに及び、初て耶蘇教徒と爲れり、之を以てコンスタン帝の心事を察するに、自己功名心欲望を滿たす爲に宗教を利用せむと謂ふに過ぎざるなり、

羅馬帝國滅びて彼の所謂查耳曼帝國起れり、是れは現今の獨佛兩國の地に起れるものなり、此查耳曼帝は羅馬人に非ずしてゴール人なり、斯人再び羅馬帝國を建てんが爲に、「チユートニック」の政治思想制度に

加ふるに宗教と云へる人心協合力（アドロンーア、メーア）を加て查耳曼帝國を建てむとするの大政策を執りたるが、矢張り宗教を利用して之を自己の功名心欲望を滿たす爲に使用したるに相違なし。

人間は兎角其手段と目的とを取違へることを免かれず、是れ羅馬法王の勢力を得る原素なり、羅馬帝國の滅ぶるや、羅馬府の大僧正は獨り宗教上のみならず各國皇帝國王の上に非常の勢力を有し居れり、斯際今の伊太利の北部なるロンバルヂの民羅馬に寇せり、查耳曼の父ペピンを征服して其一部を羅馬法王に與ふ、是れ羅馬法王が宗教以外現世の政治界に手を下す段梯の第一なり、羅馬法王の勢力是れよりして次第に加はり、佛王も英王も葡國王も何の國王たるも羅馬法王の命令に從はざるべからざる場合となれり、殊に當時封建の時代にして、各處に割據せる諸侯が直接に羅馬法王の勢力に服從せるを以て、一國の國

帝王の王

地獄極樂の鍵

兵力布茨

マホメット生る

王と雖も羅馬法王の命令に背くことの能はざるに至れり、而かして羅馬法王は歐羅巴全洲皇帝國王の王と稱するに至る。

（二）「サラセンス」の來襲

（三）十字軍

今一個の非常なる偉人顯はれ來れり、其れを誰とかなす、五百七十一年に亞剌比亞國に生れたるマホメット是れなり、斯一大偉人は自から天神直傳の宗教を發明したりと稱し、政治と宗教を混合したる所のコーラン Koran 教典を造出し、且つ云く劍は地獄極樂の鍵なり "The sword is the key of heaven and hell" 宗教をば劍を以て擴布せざるべからずとで、兵力を以て布教を始め、亞細亞に於ては亞剌比亞、波斯、印度を征服し、一方には小亞細亞より土耳其に出で、又カーセーヂより西班牙國を征服し、併太利まで出で、耶蘇教「クリスチアン」と回教「マホメッ

219209

十字軍

宗教の爲め外征

ト」と歐羅巴の中央に於て衝突せり、其結果は手段ミーンスが目的エンドと誤認せられて、宗教を以て國君自己の功名心欲望上に利用するよりも、却て其宗教の爲に外征を爲すことゝなれり、十字軍と云ふもの即ち是れなり、此十字軍なる者、第一回の役には六十萬の連合軍、第二回には三十萬の連合軍、第三回に至ては獨佛英の國王まで十字軍に加はり、歐洲封建制度の下にある諸侯皆な十字軍に加はり、パレスタインに遠征せり、何の目的を以て此の遠征を爲す乎、唯耶蘇の生れたる地を彼の回教徒（マホメット）たる土耳其人が有し居るより、其異教徒より耶蘇降誕の地を取戻す爲に過ぎず、三回の十字軍——外征をば歐洲全洲擧て之を爲すといふは、即ち手段（ミーンス）と目的（エンド）を取り違へたる頂上の時代と謂ふべき乎。

歷史は進めり

諸侯の破產

火藥の發明

外征進化の第二期——歐洲强國の勃興

王統的功名心欲望の戰爭に進化す

（ファミリーアムビション）

（一）强大國の勃興

世期は第十六世紀の新天地となれり、歷史は是れより頗る面白くなり來るなり、歐洲の政治、社會、其他の組織皆壞れて茲に一新せり、歐洲の封建制度皆な壞れ了れり、如何にして壞れたる、彼の十字軍に加はれる各諸侯は三四回の外征の爲に費用嵩み、土地を賣り財產を失し終に破產せり、而かして封建制度の下に於て有したる兵力も勢力も總べてのもの皆な失へり、恰も此際歐洲に於て火藥の發明ありし爲、兵制一變して從前弓箭の兵を要せざることとなれり、是に於て乎封建制度倒る。

自己以外の原素

建國の基礎

人種の別

又人種の別

第二は自己以外に一個自己の Abstructed thing：想像物の爲めに外征をなすことを得るに至れり、是れ實に宗教の養ひし人心發達の結果なり。

封建既に倒る、其後歐羅巴全洲の天地は如何、之を觀察せんとするには先づ何を基礎として國を建つるかとの問題に逢着するなり、羅馬帝國の衰ふるや、西部即ち羅甸帝國と「バイザンチン」帝國と分れたり、其の分離は他なし、羅甸と希臘と人種に依て分離せるなり、查耳曼帝國の滅ぶるや、佛蘭西、伊太利、日耳曼の三國に分れたり、之を觀察するに當り判然たる區別は他にあらず實に人種の區別なり、是を以て歐羅巴全洲に於て殊に英國の方には「ゲルマン」人來住し、歐洲大陸には佛蘭西、日耳曼、西班牙、葡萄牙等の强大なる國々勃興し來れり、而かして國內小諸侯の割據せるもの亡滅せ

外よりする統一

ルーサー出づ

新教の感化

るを以て、各國王は常（スタンヂング、アーミー）備兵を養ひ、兵權を一握して專制的王國を創立せり。

茲に又確然一國の統一を鞏固にせる力の外よりして此處に働き始めたるあり、夫れ歐洲に封建制度の存する間は一國の帝王と雖も充分なる力を以て其國を統御することと能はざりき、蓋し各地割據の諸侯直接に羅馬法王との關係を有し居て帝王の自由に治むる能はざりしなり、然るに封建倒るゝや、國王は自ら常備兵を有するに、所謂諸侯なるものなきを以て、國王の相手は羅馬法王に移れり、斯時に當り彼のマルチン、ルーサー獨逸に出で、「プロテスタント」新教を立つるの運動始まれり、一國の國政に法律に羅馬法王の干渉するは間違ひなりとの論は唱へられたり、「プロテスタント」新宗教の思想は「チユートニック」人種即ち獨逸英吉利の部分の人民に最も迅速に感化したり、故に英國

ヘンリー八世の離縁

英國々教の首

新舊教割據

に於てはヘンリー八世主として之に歸せり、斯人の新教に歸するや頗る可笑しきこと多し、ヘンリー八世は西班牙のチヤールス五世の叔母カザリンを娶り居しに、カザリンの侍女を嬖するに至り、カザリンと離縁せんと欲し之を羅馬法王に申送れり、西班牙のチヤールス五世は羅馬舊教第一の保護者なり、故に之を許すは法王に不利なり、法王は瞞瞞せり、ヘンリー八世之を見て、英國の宗教並に國政、裁判に關する羅馬法王從來の特權を一切廢止することの英斷を實行し、「自今英國に於て羅馬法王は其主權なし」と宣言し、親から英國々教の頭首なりと布告し、「プロテスタント」新教國に化了したり。

歐羅巴全洲は從來耶蘇舊教國なる一國の姿なりしもの、新教起るに及び新教國と舊教國と割據し始めたり、是に於て第一に其國民に起れる考へは國民的思想、所謂「ナショナル、コンシエンス」なり、之を以

て各國凝結し來れり、其の凝結せる一國を代表するものは何ぞ、國王（ソヴレン）是れなり、是れ最も見易く解し易きものなり、而かして國王と國家と同一視せられ、又國王なる思想より最移つし易きは國民（ネーション）なる問題にあらず、或は宇宙（ユニーメース）なる廣大無邊の考にあらず、最も手近かなる「ローヤル、ダイナスチー」王統（ダイナスチー）と云へる思想なり、之を以て王統的功名心欲望（アムビション）に進化しゆけるなり。

（二）墺國王統的戰爭

チヤレス五世の希望

試に其一例を擧げん、當時世界の大半を支配したるチヤーレス五世は墺地利國の王族大公爵フヰリップの子にして、母の血統を以て西班牙の王位に就き、父の血統を以て墺地利の王家其他ハプスバーグ王家の領土を繼ぐべく定められたり、故にチヤーレス五世畢生の希望は墺地利王家の名欲を滿たすことなり、然るに獨逸國帝王となるには撰擧を

フランセス一世の競爭

要することとなり、茲に其競爭者として顯はれしは佛國王フランセス第一世なり、墺地利王家の功名心欲望（アムビション）を達する爲にフランセス一世と三回の大戰をなせり、斯時には宗教と云へる思想なく、全く王統的功名心欲望の爲めの戰にして、舊教の西班牙、佛蘭西が干戈を交へしのみならず、佛王フランセス一世は「マホメット」教を奉ずる土耳其國王ソリモン及日耳曼新教諸王と同盟を結び、西班牙のチヤーレス五世が新教國なる英のヘンリー八世と同盟したるを以て之を見れば、其目的全く王統的功名心欲望即ち墺地利王統の功名心欲望に在りしを知るべきなり、此王統的功名心欲望所謂「ナアミリー、アムビーション」の爲め戰ひを爲せし時代は短時期なり。

外征進化の第三期—國家的功名心欲望（ステート、アンビション）

（一）三十年の戰爭

次に所謂國家的功名欲望と云ふ思想に進化し來れり、此國家（ステート）と云へる文字の飜譯に付ては頗る困難なり、先づステートは重に政權のある所を指すものなり、所謂政府、國王とステート、國家とは同一なりとの思想の時代には、王統的功名心欲望より國家的功名心欲望に進化するは最も順道なるべく思はるゝなり。

此王統的功名心欲望より國家的功名心欲望に移りゆく所の歐洲外征進化の事跡を歷史上に照らせば、歐洲に於ける彼の三十年（サアテーヤース）戰爭は其實例なり、抑三十年戰爭の起源は、千六百年代の初、獨逸皇帝マシアスはボヘミヤ及匈加利の國王たりき、然るに此皇帝マシアスは實子なきを以て、其皇統の繼嗣として、己れの從弟にして獨逸前々代の皇帝マキシミリアンの孫に當るファデナンドと名つくる皇族をボヘミヤの國王

となせり、ファデナンド非常に新教を排斥し、ボヘミヤの民心これが爲にファデナンドに背けり、時に千六百十九年獨逸帝アシアス崩殂し、ファデナンド第二世（セヒマン）獨逸皇帝の位を繼ぐや、直にボヘミヤを壓制し、ボヘミヤ國の新王にして新教を奉ぜるフレデリツキ王を放逐し、ボヘミヤ國土は勿論、國王の財產までも一切之を沒收し、爾かのみならず先世獨逸皇帝が曾て千六百十一年に於てボヘミヤ國民に許可したる所の信教上の自由權友國君撰立權等の眞制を破壞したり、獨逸新帝ファデナンドは此勢に乘じ猶ほ進んで獨逸國內の新教を皆撲滅せんとの期望を生ぜり、嚊馬のチヤールス四世之れを見て兵を出して新教徒を援け、瑞典王オーガスタス、アドルファスも馳せて新教徒を援けり、時に人間の思想進んで國家と王室とは同一なりと思考し、又宗教以外國家と云ふものゝ爲に戰ふべきものとの思考生ぜり、此氣運大勢に第一

リシュリュ

着目せしは佛國史に於て有名なる彼のカーヂナル、リシュリユなり、彼れは舊教國の政事家なるに拘らず、先づ新教國たる瑞典國王アドルファスに軍費を補助し、英國も亦「モラールサッポート」德義上の援けを瑞典王に與へて、西班牙墺地利二國の聯合大軍と歐洲中原に戰ふこと三十年間、即ち千六百十八年より同四十八年に至れり、而かして

ウエストファリヤ條約

ウエストファリヤの平和條約を以て其局を終結せり、此三十年間の戰爭は初め宗教の問題に起り、國家の競爭、國家的功名心欲望を達するが爲に歐洲列國合縱連衡して戰爭を爲すことに進化して終りたり、此頃よりして政治家が歐洲國勢組織若くは國勢平均なる語を用ゐ始めたるなり。

國勢平均の初め

(二)佛國ルイ十四世

此外征進化の第三期の大勢を最も充分に應用したるものは、佛關西國

佛國中興の英主

王ルイ十四世なり、彼れは佛蘭西中興の英主にして、其王位に上るや、首として西班牙の國勢に一打撃を加へ、佛國の國家的功名心欲望を增進するを目的となし、フ井リップ第四世の死するや直に西班牙領土を侵したり、西班牙は宗教より言へば齊しく羅馬舊教國なり、最早宗教の異同は問題外なり、單に國家的功名心欲望の增減を以て歐洲の中原に戰へり、此の際には英吉利、和蘭、瑞典の三國同盟を以て一と先づルイ十四世を抑へたり。

宗教は問題外

國力分け目の戰爭

國家力の競爭

(三)西班牙王位繼續に於ける戰爭

其次の戰爭は歐洲に於て最も重要なるものなり、歐洲各國々力の分け目の戰ひと言ふべきものなり、其起因は西班牙王位繼續問題なりと雖も、其實は國家力の競爭即ち國勢平均の爲なりし、西班牙のチヤールス二世死して子なし、是に於てルイ十四世の孫アンヂユーのフ井リッ

ア王位に即くか、然らざれば獨逸國皇帝（ビルマン）の第二子大公爵チャーレスが登極するか、此二途の問題生じたり、此時は最早宗教の思想はあらざりしなり、唯「ステート、アンビーション」國家的功名心欲望を遂げることと、是れ第一の目的にして、歐洲列國の聯合も是が爲に起り、戰ひも益〻大となりたるなり、當時西班牙は亞米利加に殖民地を有し、其他領土擴がり居れり、然るに佛蘭西のルイ十四世の孫アンヂユーのフヰリップを國王として兩國一同盟となるに於ては、歐羅巴の國力平均は一方に傾いて遂に大壞崩と爲るべしと唱へ、英王ウヰリヤム三世、獨逸皇帝、和蘭王は獨逸皇帝の第二子大公爵チャーレスを推し、雙方互に相爭ひ、英國の將軍にして智勇兼備の稱あるマールボーロ公は大軍を率ゐて大陸各地に戰へり、ルイ十四世は兵戰に於ては敗れたるも、外交上其素志を遂げて勝ちを占めたり、而かして佛のルイ十四世

の孫アンヂユーのフヰリップ西班牙の王位を繼くことゝなり英と和蘭とは遂に之を贊成せり、知何にして茲に至れるか、此時獨逸（ビルマン）帝崩殂して、其太爵チャーレス獨逸帝國の位に即けり、當時の獨逸帝國とは今の墺地利なり、墺地利と西班牙とを合すると歐洲國勢平均の權衡を失ふを以て、英及び蘭の二國はルイ十四世の孫を以て西班牙の王位を繼承せしむることに贊成し、佛蘭西と西班牙とは所謂「ファミリー、コンクト」家族的倒盟成り、ユートレクトの平和條約を以て先づ其局を結べり、斯くて佛のルイ十四世が「ステート、アンビーション」國家的功名心欲望を達するを以て目的としたる外征進化の第三期の頂上まで進め來り、親がら曰く『朕は國家なり』（ディタート）と、是れより歐洲大陸に於て國民的功名心欲望に進化するには佛國革命の一大險道を過ぐるの止むやおもてるあり、前かして革命の特期に到る順序を知らんと欲せば、

先づ英國に於ける外征進化の第三期より第四期に進む歴史に就て觀察を下さんことを要す。

外征進化の第四期——國民的功名心欲望（ナショナル・アンビション）

（一）オリーブ、コロンウェル政策

英國は歐洲大陸よりも常に一歩を抽んじ國家的功名心の大運動に於ては英國は歐洲大陸よりも常に一歩を抽んで居ることは歴史上の事實なり、彼のエリサベス女王が王位に即て國家的功名心欲望の時代となり、其れより「スチユワード」の王朝の時に至ては、英國は其國家的功名心欲望の頂上に達したり、其歴史を簡單に敘せんに、初め西班牙のフヤーヂナンド、イサベラ、チヤールス五世熟々考ふらく、新教を撲滅せんには英國と結ばざるべからずと、茲子フヰリップをして英の女王エリサベスを娶らしめんと欲し、結婚の事を申込めり、エリサベスの

英明なる之を拒絶せり、其結果として舊教家は內外を論せずエリサベスを王位より斥けんとするの形勢を爲せり、エリサベスは女英雄なり、以爲へらく此際西班牙に對し、先制の機を失せずして舊教を挫くに如かずと、第一に『英國王の英國內に於ける宗教上の無上最大權利法』（シュプレマシー、ヒル）と云へる新法を制定して之を發布し、以て英國の官吏僧侶をしてエリサベスは英國々政宗教の主宰者たることを誓はしめ、第二に「ナクト、オフ、ユーニフオミーチー」なる條例を設けて、國教以外の寺院に詣ることを禁じ、以て羅馬舊教に一打撃を加へたり、是に於て蘇國のメリー女王及西班牙のフヰリップ二世は宗敎上より其對敵となり、其れと同時にエリサベスは兵力を以て和蘭を援け獨立共和國として西班牙を挫けり、西班牙國王大に憤怒し、大擧して英國征伐を企てたり、此遠征艦隊を稱して不可抗的艦隊（インヴィンシーブル・アルマダ）、必勝艦

必勝艦隊

蒙古襲來の如し

全く英に擊破さるる國勢平均一變す

英國隆盛の基礎

隊と呼べり、是れ當時西班牙國君民が其國勢の強大を恃みて英國を蔑視し、豫め斯くの如く壯大傲慢なる名稱を附したるなり、之を日本の歷史に比せば宛も蒙古襲來の如きか、西班牙は百二十九艘の軍艦と大砲三千門及之に載せたる陸軍二萬人にして、加ふるに和蘭地方より三萬四千の援兵を以てし、英國を蹂躙せんとて襲ひ來れり、然るに却つて英國の爲に唯一擊の下に全く擊破し盡されたり、是を以て歐洲の國勢年均上大變を來たせり、西班牙は當時歐洲の大半を領せしのみならず、亞米利加を占め、剩さへ海上の權力を握り、國勢赫々たりしに、英國は之を擊破し盡くして西班牙を挫折し、無敵艦隊を殲滅せしめたり、斯の勝利は實に千五百八十八年の事にして、其結果として英國の國家的功名心を非常に發達擴大せしめ、以て今日の隆盛の基礎を確立したるはエリザベス女王最大の事業なり、エリザベス女王崩殂して、

帝王神權

英人種

國家的と國民的と思想の衝突

コロンウエル起る

「スチユワート」王統英國の王位に即き、チヤールス一世の如きは「國王の權力は上帝より賜はれり」とまで斷言し、以て國家的功名心の極度を施行せり、

茲に注意を要することは、英國人は所謂「アングロ、サクソン」人種なることなり、此人種は自治の精神に富み、自己の權利自由を重するの特性を有せり、國民的全性を備ふるものなり、是を以て「ステート」國家的思想と「チーシヨン」國民的思想との衝突の他に先だちて第一番に英國に起りたるは偶然にあらざるなり、其國民的思想は長期議會の開設となり、變じて英國の革命となれり、斯間に一の豪傑顯はる、其人は誰ぞ、ヲリーベー、コロンウエルなり、而かして英國は王政變して共和政治となれり、斯くて英國は歐洲大陸よりも早く「ナシヨナル、アムビシヨン」國民的功名心欲望に進化せり、英國が斯くの如く大陸よ

りも速かに進化し來れる所以のものは、其海外殖民の方法の異なれる所、一原素となりて働らけるに相違なし、西班牙、佛蘭西等の殖民の方法を見るに、コロンブスの亞米利加發見に對し西班牙のイサベラ女王が補助を與へしも、畢竟亞米利加の黄金を發掘して國庫の歳入を增すと云ふに過ぎず、佛國の殖民地を有するや、商賣を爲して國庫の歳入を增すの目的に外ならず、英國の殖民政略は之に異なり、即ち所謂殖民地の爲に殖民を發達せしむることを主眼とせり、其結果は千六百年代の初に當り、ゼームス一世の時に、バージニヤ殖民に一の「チヤーター」を與ふるまでに進歩せり、故に當時英殖民地の發達は國民的功名心欲望に進むの大勢を作爲するの要素となり、個人個と人と相共に競ふとして進むの結果となり、且つや國民的功名心欲望の競爭場裏には一大新原素を加へ來る、所謂商業なる一大力を加へ來れり、彼

のコロムウエル時代には、兵力の戰ひと商業の戰ひと兩ながら相須ちて、初て其宜を制することとなり、故に言を換へて言へば亞米利加殖民地の問題は歐洲列國の合縱連衡上に大關係を有し、大原素となれり、故に當時コロムウエル政策の目的は他無し、西班牙の有せる海上の主權及び亞米利加大陸に對する商業の權を破壞して、英國自から此二權を掌握せんとするに外ならず、而かして歐洲大陸に對する彼れの政策は、新教を奉ずる數ケ國の大同盟を作り、英國之が牛耳を執らむとするに在りし、

西班牙は英國コロムウエルの國民的政策の爲に挫かれ、殊に佛蘭西の大僧官リシユリユーの外交に依り葡萄牙の分離を來たし、全盛を極めたる西班牙の勢力は地に墜ちたり、之に代て勃興しなる國は和蘭なり、和蘭は當時貿易を以て國是となし、航海の主權を占有せり、是れより

和蘭と英國の競爭起れり、チヤールス二世の時、蘭と英との競爭は全く新世界に於ける殖民地商業航海の競爭にして互に相爭奪せしが、其政策たるやコロムウエルの政綱に則とりたるものにしてチヤールス二世の有名なる航海條例（ナビゲーション、アクト）は和蘭の航海權を破壞し、之を英國の有に歸せしめ、而かして遂には當敵國のルイ十四世と同盟して新敵國の和蘭を打擊せり、當時アシリー、バークスの言に、「和蘭は太洋及新世界に於ての競爭者なり、假令當敵國と同盟するも之を擊ち滅さゞるべからず」と、是に由て之を見れば當時の競爭は商權の爭奪にして所謂國民的功名心欲望を滿たす爲たりしや明かなり。

（二）七年間の戰爭老ピットの政策

國民的功名心欲望を達する政策の地盤はコロムウエルに依て創立せられ、チヤールス二世の和蘭に對したる政策に依て成り、ウイリアム、

ピットの佛國に對する政策に依て頂上に達せり、西班牙の王位繼承問題に於ける戰爭は前に述べたるが、ルイ十四世は國家的功名心欲望の爲に之を爲し、英國にては國民的功名心欲望を達する爲に戰ひ、而かして「ボアボン」家のアンジュのフリップ西班牙の王位に上り、佛蘭西と西班牙と家統的同盟を作り、一方には之に對して英吉利、和蘭、墺地利の三大同盟を結べり、是に於てウイリアム、ピットが最も非凡の大腕力を現はす機會出で來れり、其機會とは七年（セヴンイヤールスウオー）の戰爭是れなり、フレデリツキ大王普魯士に出づ、當時の普魯士は最小なる國なりき、當時に墺地利は一方には佛蘭西と條約を結び、一方には露西亞、波蘭、サキソニー、瑞典と條約を締び、普魯士國を分割せんとせり、フレデリツキ大王は先きんじて人を制するに如かずと決斷し、普魯士一國を擧げて殆んど歐羅巴全洲に對して戰ひを開らけり、唯賴みとする所は

英の一國あるのみ、然るに英國は兵力を以つてフレデリッキ大王を援くる力を有せざるなり、故にフレデリッキ大王に軍資を與へて歐洲中原に於て戰はしめたり、七年間の戰爭とは即ち是れなり、是に於て歐洲の形勢は一と通り段落を告ぐるなり、是れより先き和蘭衰へて、佛蘭西にはルイ十四世、マザーリン、コルベールの諸豪傑輩出し、佛蘭西の國威は旭日の東天に上るが如く、終に英佛兩國の決闘となる、是れ彼の七年間の戰爭を一方より觀察したるものなり、英は一方にはフレデリッキ大王に軍資を與へて佛國に當らしめ、自國は歐洲大陸を餘處に見て、亞米利加に、印度に、海洋に、全力を注て以て海外各處の佛蘭西民地に大打撃を加へたり、ピットの政策目的は全地球上に在る佛蘭西の殖民地を破壊して之を奪び去るに在り、クライブをして印度のプラッセーの一戰に佛蘭西の勢力を挫かしめ、將軍ウォルフをして

て加奈太に其名譽を擅にせしめ、斯くの如くにして佛蘭西の海外屬地を片端より押領したるが故に、彼の七年間の戰爭の終りたるときは佛蘭西の殖民地、佛蘭西の市場は大半英國に奪び取られたり、ウイリアム、ピット笑て曰く『フレデリッキ大王に軍資を贈りしも英國は少しも損せざりし、普魯士をして佛蘭西に當らしめて、英國は亞米利加及印度を獲たり』と、斯くの如く佛蘭西の殖民地を破壊して、ピットの創立したる英國は外征進化の第四期國民的功名心欲望を達するを以て主眼となし、國家的功名心欲望は殆んど是れあらざりき、特に當時英國には獨逸の「ハノーベー」家のジョージ第二世が王位に即いて、ウイリアム、ピットと其交情宜しからず、ジョージ二世は獨逸のボヘミア先王の血統にして、今や來て英國の王位に居る、大宰相ピットは敢て意に介せざるも、英國一般國民は此王室を感戴すること十分ならざる

の姿あり、當時ピットの志願は他無し、英國國民を富强にし以て世界第一の國民たらしむるに在り、英國をして世界第一等の富强國たらしむるに在るのみ、故にピット自からも英國人民より推稱せられてGreat Commoner（グレート、コムモナー）の名號を受け、之を滿悅したることの偶然に非ることを知るべし、ピットは英國をして國民的功名心發達の極度に達せしめたるものにして、英國が外征進化の第四期の頂上に達したるは他の歐洲大陸列國よりも先だつこと數十年なり、歐洲大陸は英國よりも遙かに後れて外征進化の第四期に赴けるなり、

凡そ物盛なれば則衰へ、勢極まれば則變ず、ウイリアムピットの政策も亦、また豫期外の缺陷を招くことを免かれず、缺陷とは何ぞ、他無し、北米殖民地の獨立戰爭即ち是れなり、此戰爭の原因は固より多々ありと雖も、之を要するに北米殖民地の人民は國民的功名心の發達

せる結果として、此の大戰を起こすに外ならず、彼の北米殖民地の人民は國民的政府、民主的政府、共和的政府、即ち國民の政府、國民に依て——國民の爲に政府を立つるものとの原則を基礎とし、亞米利加の獨立戰爭を起したるなり、是れ所謂「ナショナル、アムビション」の行き過ぎたる結果と見ても誤謬なからん、十三州の代表者盟約して英の本國に反抗して戰爭を開らけり、佛蘭西と西班牙は此機に乘じ英國に向て昔日の復讐を爲さんと欲し、亞米利加を援け、佛蘭西は第一に亞米利加の獨立を是認したり、氣運の赴く所、英國政府も之を許さゞるべからざるに至り、茲にウイリアム、ピットの國家に盡す精神は實に幾何の度に達せるかを知るを得るなり、所謂盤根錯節の際に當て人の國家に盡す精神は初めて顯はるゝものと思はる、當時英國の首相はロッキンハム侯にして、エドマンド、バーク氏之が幕僚たり、英政府

が亞米利加殖民地十三州の獨立を許すの政策を聽くや、ピットは古稀の齡に近しと雖も、慷慨措く能はず、自己の一代に於て是れ程の殖民地を擴張したり、然るに今日亞米利加の獨立を許すは遺憾千萬なりとて、小ピット、ロードマホン二人に助けられ、病中なるにも拘らず、田舍の別莊より出府して、議院に出席せり、時に上院に於てはリチモンド公爵は亞米利加の獨立を許すことを發議し、ピットは突と起て米國の獨立を許すべからざることを演說せり、當時のピットの精神を見るに、彼れが少壯の時デボンシャ公爵に向て生涯の大志を談じ『將來英國を拔けてゆくは拙者なり、拙者以外其人なし』と言へり、其の精神、即ち國家の重きを雙肩に荷ふの氣慨斯時に溢れ居るなり、リチモンド公爵之に答へ、ピット再び起て何か言はんとするや、手を胸に當て忽然として倒れたり、其後呼吸は復び開きたれど終に起つこと能はず

して逝けり、武人戰場に向ひ彈丸に倒る敢て難きにあらず、去れど國家を以て任ずる精神を以て、謂文官の討死に至ては歷史上ピットの死の如き潔きものは他に比すべきもののあらざるなり、此の精神の貫徹する所、今日英國が世界の覇權を握れる基礎となれるなり、日本が東洋の覇權を握る覺悟ならんには宰相が病ひの爲めに政務を餘處にするが如きは其可なるを知らざるなり、而かして氣運の至る處、大勢の趨く所、止むを得ず、英國は亞米利加の獨立を許せり、亞米利加の獨立は所謂歐洲大陸列國の國家的功名心欲望を移してそれを國民的功名心欲望に進めるの媒介と爲れり、亞米利加の獨立を許せる結果は佛蘭西人も亦王政の下に默從し居ることを肯んぜず、佛蘭西革命の氣運之が爲に誘起せられ、勃然と迸裂したり、國家的功名心の時期より一足飛に國民的功名心の地域に急進せ

るは佛蘭西革命の精神なり。

(三)佛國革命

佛國人民は國民的功名心の地域に急進し、着々と佛蘭西の革命を實行しゆけり、其極度は自國の王朝を倒したるのみならず、歐羅巴諸洲中國王を戴ける國は皆敵國なりその宣戰布告を發せり、佛蘭西國民は歐洲の中央を荒れ廻りて底止する所を知らざるもの、如し、歐羅巴全洲は驚けり、如何に結局すべきやとは皆な人の憂ふる所なりき、時に一場の演說を爲し三寸の舌を以つて此の非運を回制したるものはエドマンド、バークなり、歐洲全局の人心は是非善惡の判斷に迷へり、既に亞米利加の獨立を是認せらる佛國の革命亦た無理ならずと思惟せり、然るにエドマンド、バークは斷案を下して曰く『革命は社會上より判斷するも、政治上より判斷するも、徹頭徹尾有害なり、是は世界の人生

の有害物なり』と、鶴の一聲を以て世界の氣運は佛蘭西の革命を是認せざるの結果となれり、エドマンド、バーク氏の演說は後世に至て實も非常なる結果を來たせり、「ナショナル、アムビション」より今一層人間の思想進歩して「コスモポリタン」所謂宇宙間人生なる者に考及する所謂十九世紀の外征進化の大勢に進みゆく所の一里塚となるもの是れなり。

外征進化の第四期より第五期に進化する

媒介—奈翁第一世の政策

問題は是れより尙ほ一層面白きなり、外征進化の大勢上、第十一期個人的功名心欲望、第二期王統的功名心欲望、第三期國家的功名心欲望の時期去て、佛國革命に於て第四期國民的功名心欲望の頂上に進したた

るを以て、世界は是れより如何に成りゆくべきかを注目し居れり、時に歐洲の中心に顯はれ出でたるは古今獨歩の豪傑奈翁一世なり、奈翁一世の頭腦を解剖し來れば頗る面白く感ずるなり奈翁一世は流石に世界の大豪傑なり、外征進化の大勢を古今に亘りて嚼取して巧に之を調合して以て己れの事業に應用したり、外征進化の一期を適用し、若くば二期を兼用したる英雄ありと雖も、奈翁第一世の如く希臘時代より十八世紀の終に至るまでの外征進化の各期を悉く一緒(コンメイン)に集めて應用の妙を盡くしたるものは古今に絶へて無し、即ち言を換へて精しく言へば、能く「パーソナル、アムビション」を用ゐ、能く「ファミリー、アムビション」を用ゐ、又能く「ステート、アムビション」を用ゐ、其上に宗教をも利用し盡能く「ナショナル、アムビション」を用ゐ、其上に宗教をも利用し盡たるものは是れ實に奈翁一世の事業なり、希臘時代より十八世紀の終

りまで外征進化の大勢を我物にして、時に應じ場所に從ひ能く之を應用したる豪傑は所謂奈翁一世なり、抑も稀世の豪傑さへ大勢氣運を應用せざれば成功せざるなり、而かも況んや稀世の英傑以下の人に於てをや、然るに彼の薄志弱行の政治家は大勢を應用することを能はずして單に氣運の寵兒を以て終るものなり。

試みに奈翁の應用せる所を事實の上より證明せんに、奈翁一世が埃及より歸て政權を一手に掌握したるは、羅馬のシーザーがゴールより歸て政權を一手に執たる際の個人的功名心欲望を再演したるものなり、奈翁一世の和闌を征服するや其弟ヂョセフを國王に封じ、西班牙を切り從つて其弟ヂョセフを國王に封じ、ウエストファリア國を創建するや其弟を國王に封じ、伊太利を取るや自ら其王位に上り、遂に埃地利帝の皇女マリーア、ルーイサを娶で歐洲の全局を維持せんと

奈翁の一大事業奈翁の對英方略

英の強大は國民に在り

企てたるは、西班牙のチャールス五世が王統的功名心欲望を適用したるに外ならず、其れより奈翁一世は伊太利を押へ、西班牙を討ち、葡萄牙を征し、歐洲を蹂躙したるものは佛のルイ十四世の國家的功名心欲望を應用したるものなり、而かして奈翁一世畢生の目的は英國に一大打撃を加へ、世界上に於ける英國の殖民商業及航海の權を挫かんとするに在り、英國の强大なるは政府にあらずして其國民に在り、即ちウイリアム、ピットが英國民の國民的功名心欲望を達せしめ是れが頂上に到らしめたるものなり、故に奈翁一世は歐洲に於て大に英國民を撃ち破らざれば能く外征進化の第四期を應用したるものと謂ふべからず、是を以て、奈翁一世は英國を征討するを以て一大事業となし、自ら曰く『吾れをして六時間英國の海峽を占有せしめば吾れは世界の王たらん』と、奈翁一世は英國を困窮せしむるを方略の第一とし、先づ

外交政略を運らし歐洲大陸各國を聯合せしめ、直接と間接とを問はず英國との商賣を禁ぜり、是れ奈翁一世の歐洲大陸の聯合對英政策なるものなり、即ち英國の「ナショナル、アンビション」の反對に出で、此方よりして國民的功名心を遂げんとしたるなり、埃及を伐ち以て印度と英の本國を斷ち、又露西亞を討てり、蓋し歐洲大陸を聯合し英國を兵粮攻めにせんとを企つるに方り露西亞は竊かに之を破りたればなり、故に奈翁一世は露西亞を討ち其勢ひを以て間接に英を征せんとの胸算なり、其の露西亞を征するや非常の大軍を發し自から將として深くモスコウ府に入れり、是れ畢竟英國を撃せんが爲なり、其他西班牙、葡萄牙に出で、或は白耳義のウオタールの戰ひに至るまで其目的は英國の國民的功名心欲望を破壊して佛蘭西の國民的功名心欲望を確立せんと欲するに在り、遂には亞米利加及印度を英國より恢復し、ウイリア

ム、ピットが運用したる所の國民的功名心欲望の發動に對抗し佛蘭西の國民的功名心欲望を遂げんとせしものなり、加ふるに其帝位に就くに當り羅馬法王パイアス七世を招き法王より帝冠を己れの頭上に戴かしめ、宗教を信ぜしもの、如く振舞へり、是れ蓋し査耳曼帝の古智を學びたるものならん、斯くの如く「ナショナル、アンビション」「ステート、アンビション」「ファミリー、アンビション」「パーソナル、アンビション」を調和して、外征進化の四期を兼用したればこそ、一時歐羅巴全洲を風靡せしめたれ、派手なる事業も出來たるなれ、去りながら歐羅巴全洲豈に奈翁一世の一蹴に一任し置かんや、反抗の氣運は大に興れり、三回四回歐洲列國の同盟を結び其牛耳を執りたるは英國にして、當時の當局者はウイリアム、ピットの子小ピットなり、小ピットは是れ亦一世の豪傑なり、少にしてケンブリッヂ大學に遊び、アダム、

スミスの富國論を學び、終始平和政策を執るの覺悟精神を有せり、然るに佛蘭西革命あり餘勢英國に迫まり、攻撃山倒海の勢ある奈翁一世佛國に起りて英國を蹂躙せんと欲す、小ピット止むを得ず防禦的に歐羅巴の數個國と聯合しコッペンハーゲンに或はトラファルガーにネルソンをして佛の艦隊を撃破せしめたり、然れども奈翁一世破竹の勢中々當るべからず、歐羅巴全洲も奈翁の言ふ儘、爲す儘と云ふ形勢に迫り來れり、最後に小ピットは露西亞、墺地利、瑞典と同盟して、今一戰を試みんとし、諸國に軍資を貸し其額九百萬磅の多きに上れり、現時より之を見れば九百萬磅は僅少なりと雖も、當時に在りては頗る巨額なりとす、而かも英國の國債は日々其の額を增加し來れり、斯くの如くにしてオースタリッツの一戰に其運命を決せんとせしに、奈翁の爲め大に破られ聯合軍は粉碎にせられたり、時に小ピット齡四十七、

小ピット昏倒

小ピット失望

死に至るも國を忘れず

餘財なく負債あり

積年英國の爲め非常に盡瘁したる結果身躰衰弱して氣息奄々たり、而かして最後の四個國聯合軍がオーステルリッツに破られたる敗報を聞くに及び遂に昏倒せり、既にして慨然として『最早歐洲も是れ迄なり、復た救ふべからず、壁上に懸けたる歐洲の地圖も十年間は用なからん宜しく巻て之を藏むべし』と言ひしと傳ふ、是れより病勢愈々劇を加へ、其の將に瞑せんとするに臨みピット何事か言はんとするもの、如し、左右近つき耳を傾けて之を聽けば、ピット曰く『嗚呼英國よ、吾れ今英國を棄てゝ死するに忍びんや』と、一言空しく遺りて終に長逝せり、噫國を念ふこと切ならざれば眞個一國の宰相と稱すべからざるなり、ピット逝て後、彼れの財産を調査せしに四萬磅の負債あり、其姪ヘスタア、ネタートン及び其妹兩人も翌日より衣食に窮すと云ふ狀態なり、故に議會は其負債償却と、其姪へ年々千二百磅、

老西郷

七個國の聯合

兩妹へ六百磅宛を贈與することを決議せり、子孫の爲に美田を買はずとは東洋豪傑の專有物ならざるなり、實に是れ徳一家の威福一身の榮譽を國家の爲に犧牲に供する誠忠の心あらざれば其國の位置威望を宣揚することは覺束なし、此の精神あらずんば東洋の覇權を掌握するなど先づ口に出さいるを可とせずや、誠みに思ふ多く、黄金を有し勳位人臣を極め、而かして國威を墜さいるの働らきを爲さば是れ最上のことなり、去れど之を以て凡庸政治家に望む甚だ難からずや、本邦に於て維新の大業を翼賛し眞個に子孫の爲に美田を買はざりしは老西郷なり、是れ吾人が今日追想に堪へざる所以なり、

ピット父子、共に國家に盡瘁し、斃を戰場に暴せる武人に優れたる最期を爲せり、歐羅巴全洲の形勢は日々に切迫し來れり、竟に歐洲七個國の聯合成れり、英のウエリントンと普のブルーカーを總大將とし、

奈翁一世と大にウオータールーに戰へり、奈翁の意氣唯一蹴に英國を倒さん程なりしも遂に大敗を招き、セントヘレナ島に流竄せられ、歐洲を舞臺とせる奈翁の一大演劇も玆に其終を告げ、千八百十五年墺都維也納に於ける歐洲列國大會議となり、是れより十九世紀の新天地を顯出し、外征進化の第五期に進みゆけり。

外征進化の第五期—宇宙人生幸福の增進

（一）世界の平和を保全して各國其國利を進む

（二）世界の文明を進導して人生の義務を全ふす

歐羅巴全洲奈翁一世に蹂躙せられ、四回まで列國聯合軍を以て之に反抗するに當でや、列國宗教異同の思想を棄て、個人的功名心欲望の念を去り、王統的功名心欲望の考を棄て、國家的及び國民的功名心欲望

を一擲し、唯其國々の存在（エキシステンス）を計るに專らなりし、然るに今や奈翁敗れてセントヘレナに流され、歐洲全土は大風後の如く、歐洲の七個國は善後策の爲め、墺都維也納に於て會議を開き、歐洲の復古を議し、列國其境界を保て相犯すことなく、歐羅巴の平和を維持することを期せり、是れ「二十年來歐洲の大戰亂に於て奈翁の爲に蹂躙せられ、其禍害を蒙りたる列國の意向なりしや明かなり、某詩人ウオーターローの戰を詠じて『平和は打ち勝てり、平和は戰爭より芳し』と言へり、ウオーターローの戰爭が十九世紀の機勢を作爲するの眞情を窺ひ知るべきなり、維也納の列國會議に臨席したる英國全權大使カスレリーは將來歐洲大陸に於て奈翁一世の如き英傑再び出で、歐洲聯合制英策即ち「コンチネンタル、システム」を再び應用して、歐洲大陸と英國との商業を斷ち、英國を兵糧攻めにすることあらんことを恐れ、「ナショナ

ル、インテレスト」即ち國利保護の問題を會議に提出せり、國利保護の必要なることは獨り英國のみならず、其他の國々に於ても其國利を保護せざるべからずと感ぜり、各國の使臣に異議あるべきようなし、故に歐洲平和の維持と、各國其國利の保護、此二個を大本とし原則として維也納大會議の議決と爲せり。

二原則

合同の氣運

抑も最初は英國に反抗するが爲に亞米利加の聯邦生じ、ワシントン是れが大統領たり、其れより奈翁一世に反對して歐洲列國聯合せり、畢竟一國を以て大強敵に當ることと能はざるより、數國聯合して強國の雄飛橫行を制し以て平和を保全するなり、此十九世紀に於て平和を保つと云ふ問題より、聯邦問題も自然割出され今日大に勢力あり、獨逸聯邦、伊太利各小邦の統一となれり、

前に述べし如くエドマンド、バーク氏は佛國革命を排ずるに於て、宇

宙人生論（ユニバーサル、ヒューマニチー）を述べて十九世紀初期に於ける人々の長眠を醒し、ウルバーフォース氏は奴隷廢止論を主張して倍々所謂宇宙人生論を事物上に確かめ、又アダム、スミスは十九世紀の初めに出で「マーカンタイル、システム」重金論を破壞して經濟上の一大原理を發明し、初めて國家貿易區域を擴張し、ワットの蒸氣發明はスチーブンソンの鐵道創造となり、フランクリンの電氣發見は電信の發達となり、蘇士運河の開鑿より航海の進歩等、一として世界を縮地せざるなく、人々世界の全局を達觀するに至り、世界一部の平和維持は進て全世界即ち宇宙平和（ユニバーサル、ピース）保全の大勢となり、且つや各國其商業工業の發達を計りて國利を增進することを忽にせず、十九世紀の半ばに至ては外征進化の大勢一定して「コスモパアサル、ピース」宇宙の平和、或は世界一部の平和、例ば歐洲平和（ユーロパン、ピース）、東洋平和（オリエルタル、ピース）を保持し其れと同時に各國自國の商業工業の

宇宙人生論

奴隷廢止

經濟の原理

發達を計る、即ち「ナショナル、インテレスト」國利を增進する爲には外征を爲すことに進化しゆき、次てコブデン、ブライト兩氏出で自由貿易を主張し、十九世紀の世の中に保護貿易は狹隘なり、四海兄弟、人類の幸福を進めることを以て任務と爲すべきを唱へ、ロベート、ピール氏は終に之を國策に運用して自由貿易を開らけり、平和保持と國利增進とをば離るべからざるものに結び付けたるは自由貿易の効果なり。

世運進歩して斯處に至れる時、千八百十五年納也納の列國會議は開かる、同會議は奈翁一世の歐洲擾亂に對する善後策を講ずる爲めにして、自然防禦的たるなり、然るに十九世紀の半ばに至て歐洲の形勢も復古靜謐に歸したるを以て、自然外征進化の積極的大勢の必要を生じ、唯平和保全を國利保護の二個を以てしては實際極めて不足を感じ、世界

の文化所謂「シビライゼーション」を進めるは人生の義務にして、人間の幸福を進めるより大なる任務なし、故に世界の文化を進める爲に外征を爲すは一國が世界に對する義務と認められるゝに至れり、然らば世界の文化とは如何、先づ政治上の秩序（オルダー）、社會上の秩序（ソシアル オルダー）の二者を善く保ち、且つ十九世紀の科學の進歩を實際に適用することを稱したるものなり、此三者を保全運用して以て人生の幸福を進めるは人生の義務なり、之が爲めならば他國と戰ふも正理我れに在りとするの大勢となれり。

是を以て十九世紀の今日に於ては、外征進化の大勢は他なし、前に述ぶるが如く一國なるもの其國是を一決して、以て能く宇宙平和（ユニバーサル ピース）、或は歐羅巴、東洋の如き世界一部の平和を保つ爲めと自國の國利「ナショナル、インテレスト」所謂商業工業の發達を計る爲、之に加ふるに世

界の文化を進め、即ち政治上の秩序、社會上の秩序を保ち、十九世紀の科學の進歩を適用する爲には、兵力を以て爭ふも、名義我れに存して世界の同情は我れに追從するに在り。

其れ然り熟ら外征進化の大勢の變遷を觀來れば、個人的功名心欲望より最も手近き王統的功名心欲望に移り、其れより國家的功名心欲望に變じ、是れが再變して國民的功名心欲望となり十九世紀に及びては宇宙人生の幸福を增進すべしと迄進化せり、人間の外征に就て思想の進歩も驚くべからずや。

既に上古より現世紀に至れる外征進化の歷史を敘述せり、是れより進んで是れが應用を講ぜん。

外征進化の應用

（一）歷史上誤用の證左

玆に外征進化の應用を說くに當り、其途二あり、一は即ち此外征進化の大勢の適用を過れる國は失敗して國威を辱かしめたることを歷史上證明するとにして、他の一は戰捷後我邦が東洋に對し世界に對して應さに爲すべき任務は十九世紀に於ける外征進化の大勢に則とり覺悟經營すべきことを是れなり。

先づ其應用を誤れる歷史上の事實よりとを、述べん、奈翁一世の沒せる後、十九世紀に於て歐羅巴の覇權を握らんと企し者は墺地利の大宰相メテルニヒなり此メテルニヒは十九世紀の外征進化の大勢たる「ユニバーサル、ピース」即ち宇宙の平和を保ち文白國の國利を進め世界の文化を誘導して人生の幸福を增進するをを國政の基とせずして、而も徒らに詭謀僞策を以て政略と誤解し、唯自己を人傑と稱せられんと

欲して歐羅巴の覇權を握らんと企てり、故にメテルニヒは自國の兵力も不充分なるに拘らず、專ら外交的權略術數を以て日耳曼伊太利の內政に干渉せり、而かも外交は其國是方針を定めて、國家の實力所謂兵馬の權を以て之を遂行することは、此メテルニヒの甚だ執らざる所にして、外交政略を機敏にして警察秘密探偵を到る處に周備せしめて隣機の策を施すと云ふに在り、メテルニヒの內政其他外交政畧を總括して之を評すれば、日本に於て近頃流行する八方美人政略と云ふものと同じ。

メテルニヒは首相の重職に在ること千八百十一年より同四十八年に至るまで三十八年、此くの如き長歲月間墺國に於ては未だ嘗て人を導き世を益する進取的良案企圖の行はれたるを見ず、徒に其國民と世務とをして頑鈍昏頓停滯不動の幽場に陷らしむるの法令を施行せるに過ぎ

ず、其結果ベースは墺國より分離し、獨逸は北部聯邦を造りて墺國と對峙し、今日は歐洲大陸に於て、財政紊亂、人心腐敗、其最も危むべき國は墺地利なり、然る所以のものは他無し、メテルニヒが外征進化の大勢に反し、墺國政策の方針目途を確立せず、個人的功名心欲望を滿たし、榮華を極め、三十八年間墺國の政權を執り墺國人民を苟安的に陷れたる結果に外ならざるなり。

其次には奈翁一世の倒れたる後に、墺地利、普魯士、露西亞等の國王相約して神聖同盟（ホーリー・アライヤンス）を造り、以て歐羅巴の平和を保たんとしたり、去れど神聖同盟なるものは永續せず、墺國宰相メテルニヒ一世の崩殂と共に忽ち衰へたり、然る所以のものは他なし、宗教を以て歐羅巴の大勢を制するの時期は既に過去に屬せるを以てなり、故に彼のモンロー政策の一言を以て破壞せられ了はれり。

クリミヤ戰爭の誤用

彼得帝の政策

ニコラスの功名心

其次は彼のクリミヤの戰爭なり、是れ十字軍の目的と同じく、耶蘇誕生の地を露西亞政府保護の下に置き、又「マホメット」宗なる土耳其國に在る耶蘇敎徒を露西亞政府の支配の下に置かんとの企てを爲せしこと、其戰爭の起因なり、斯くの如き外征の名義は十九世紀に於て容れらるべきにあらず、尤も露西亞が世界に對して勢力を得始めたる所以は彼得大帝以來の事なり。

露の彼得帝は千六百年代の末より千七百二十五年迄の人なれども、其政策の精神は十九世紀の大勢に合ふ所あり、兎も角も平和の手段を以て露西亞の國民の幸福を增進するに在り、故に瑞典と干戈を交へたるも全く已むを得ざるに在り、然るに其十九世紀に至りては露の政策も變遷してクリミヤの戰爭は露帝ニコラス帝の個人的功名心野心を逞しふすることに偏行し始めたり、之に對する英佛土の同盟軍は全く外征

進化の第五期の大勢に順行せしことは、其同盟軍の牛耳を執りし英國當局政治家の思想を見るも明白なり、即ちロードパーマーストンは露西亞軍のダニューブ河を渡れる際に於て、當時の總理大臣アバルデーン公に向て四ケ條の意見書を送れり、其第三條に於て、速に英國の軍艦をダアーダアネルス海峽に入るべきことを論じて曰く『露帝及び其左右の人をして大に警戒し、其虎狼の慾を薄ふせしむることを得べし云々』と、アバルデーン公は當時の英國の人心を評して曰く『英國の人露國のニコラス帝を目して純然たる暴主にして歐洲大陸に於ける自由の公敵と爲さいるなし、又嘗て波蘭人民を抑壓したる暴主にして英國の公敵たるのみならず亦生民の權理及世界文明の深敵なりと認めたり云々』、語を換て言へば、露國は十九紀外征進化の大勢に反對するものと判斷したるものにして、露は敗れ英佛聯合軍が其勝を占めたるも偶

然にあらざるなり。

其の次は露土の戰爭なり、此の役に於ては露西亞は其個人的功名心欲望と國家的功名心欲望とを交も展ばさむとて、ブルガリヤに於ける宗教問題を取て土耳其に向て開戰し、百萬の兵を發してバルカン半島を下り、全勝を得てサンステファナ平和條約を訂結するや、英國の故障に依て、彼の伯林に於ける列國會議となり、英のビーコンスフヰールドの爲に散々に破毀せられ、兵戰の勝利は變じて外交上の大失敗となれり、而かしてビーコンスフヰールドが伯林に於て赫々たる功名を立てたる所以は、十九世紀の外征進化の大勢を後楯に取り、世界の同情を得たるに外ならず、故にビーコンスフヰールドの伯林會議より英國へ歸るや、『名譽、平和、一つながら得たり』と云ひ、又上院に於て演說して云ふ、『今回の伯林會議に於て英國は毫末も戰意を挾みたるにあらず、徹頭徹尾平和を企望して世界の文明を輔導せんことを欲せり』と、彼れは更に毅然として揚言して曰く、『我英帝國は是れ自主と正直と信義との本國なり』と、即ち英語にて Our Empire is an Empire of liberty, of justice and of truth. 是れ彼れが演說の結語なりき、實に十九世紀の外征進化の大勢に確然と合たる政策の執りかたなり、之れが爲めに一兵をも勞せずして勝ち誇りたる露西亞百萬の兵に外交上より一打撃を加へ、露國をして顏色なからしめたり、世界の大勢を達觀する政治家の國家を益するや大なりと謂ふべし。

近ごろ十餘年前に於ける佛帝奈翁三世も西班牙王位繼續問題を以て歐羅巴洲に打つて出で、以て其個人的功名心と其國家的功名心とを遂げんと企てたり、去れど獨逸の爲に大敗し、遂に英國漂流の客となりて終れり是れ全く奈翁三世が外征進化の大勢を覺得せざりしに由る。

自主と正直と信義の本國なり。

其他近十年來に於ける獨墺伊三國同盟、或は露佛二國同盟、或は東洋に關する佛獨露の新三國同盟も、其實は兎も角名義は外征進化の第五期を主として成りたるものにして、日本が遼東半島を占領するや新三國同盟は永遠東洋の平和を維持する所以にあらずと謂て忠告し、語を切にして言へば干渉し來れり、是れより先き明治二十七年七月日清戰爭の起るや、英國は自國の國利「ナショナル、インテレスト」を保護する爲に日本政府に向て早くも商議を起し、日本軍艦の上海を侵すことなからんことを乞ひ而かも之が條約を結ばせたり、日本も現十九世紀に於て自ら決心し、儼然卓立して以て此世界列國の間に立てる以上は外征進化の大勢を明かにし、而かも其國家的功名心欲望若くは個人的功名心の奮奪を株守することなく、之を超脫したる所の宏大高尙なる活眼と決心とを以て一國の外交及外戰を爲さいるときは君を辱かしめ國を辱かしめ天下の大事を誤るに至るものなり、豈に痛省せざるべけんや。

我國が清國に向て宣戰を布告するや東洋の平和を擔保するに在りて、實に能く十九世紀に於ける外征進化の大勢に適合したり、去れど其結果は如何、之を外征進化の第壹期なる大勢に照して評論せは頗る興味深かるべん、余が本論の目的は學術上より外征の進化を講ずるに在れば時事問題は姑らく他に讓り、將來、即ち外征進化の大勢より割り出したる將來の覺悟、未來の經營に就て陳述せんと欲するなり、是れ寧ろ學術上研究の妙所ならずや。

(二一)戰捷後我邦は十九世紀外征進化の大本に則とり覺悟經營すべき事

抑も第十九世紀に於ける外征進化の大勢の原素の重なる部分は世界の

平和或は世界一部の平和を維持するに在り、日本が日清戦争後世界及東洋に立つには、戦はざりしならばイザ知らず、苟も一たび戦ふたる以上は、眞個に東洋の平和を擔當するの任務を完ふせざるべからず、而かも此事たる極めて重大に、極めて宏遠なる任務たるは勿論なるが故に、通常の覺悟を以てしては之に當るに足らざるなり、日清戦争の結果として朝鮮は強を致さざるなり、支那も却て弱を示せり、遼羅も亦た益危急を加へたり、東洋の大勢上より之を見れば日清戦争前こそ却て東洋の平和は保全するに容易なりしなれ、去れば日本の任務は益々重大となりしことを我が國民は彌々決心せざるべからず、朝鮮、支那其他の東洋諸國が自から瓦解するが如きことあらば自然東洋の平和は破るゝことなれば、此際日本は充分奮發して東洋平和の保全者たるの責任位置を全ふせざるべからず、且つや豫想外に支那の腐かりし結

果として歐羅巴強國をして東洋侵害の念を惹起せしめたるは自然の勢ひにして怪むに足らざるなり、君し歐洲強國にして無遠慮にも東洋蠶食の擧に出でば、我れは外征進化の大勢に則とりて鐵火の實力即干戈を以てするも飽くまで東洋の平和を維持するは我邦が世界に對する義務なり、此東洋平和の破裂は將來果して何の時に在らむ乎と問はゞ他無し、次の三時期に在り。

第一は歐洲に於て獨墺伊三國同盟の年期の盡きる時に在り、此時に當り歐洲の聯合は今日の儘繼續せらるゝ乎、伊太利は貧乏し、墺地利は腐敗す（メテルニヒの政策の結果なり）獨逸も此の二國を相手として歐洲中原の形勢を制することは能はざるは自から知る所なり、一方には露は佛に結び歐洲の紛爭時期の到來するを窺ひ居れり、仓縱連衡は爰に變するか、或は今日の儘に繼續するか、此時歐洲は機運の變に由ては

其二

大亂の發するかも料るべからざるなり、歐洲大亂となれば東洋のみ大平和を維持することを能はざることは勿論なり、或は英露兩國東洋に於て衝突することもあるべし、此時は日本の一大奮發を要する時期にして今より十二分の覺悟經營を怠らざれば我邦に取ては一大幸運の機會なり。

其次は露國が日々經營し居る西比利亞鐵道全通の時なり、露國は平和の目的を以て之を布設するに相違なし、若し十九世紀外征進化の大勢に反して東洋蠶食的の運動を始むることあらば、我邦は東洋平和の爲に一大覺悟を要す、特に尤も注目すべきは其鐵道の最終點は浦鹽港に出だすか、所謂遼東半島に出だすか、朝鮮の元山に持ち來れるか、露國が自國の領土以外に押し出だすに於ては、東洋平和破裂の種子時きにして、苟くも東洋に利害得失の關係を有する國々、特に我が邦の

其三

如く東洋平和の擔保者を以て自任するものは十二分の覺悟を要すると勿論にして日本の前途外事多端と謂ふべし。

又其次は今日より我邦の軍備擴張其他一切の國策を實施し、東洋の覇權を握り、永遠に東洋の平和を維持し、進では世界の平和を保全する國任を盡すことの爲に、既に其準備に着手し居れり、此準備の悉皆完整したる上は他國の進み來るや否に關せず、是れより進んで外征進化の大本に則とりて亞細亞最終の處分を爲す覺悟なり、之を成し遂げざる以上は東洋の天地に於ける永遠の平和は期すべからざるなり、此亞細亞最終の處分は我が邦の思考する如く之を爲し、苟し之に異議を挾み、反對がましきことを爲す國あらば國の大小を論ぜず、日本の實力を以て之を排斥して其最終の處分を遂げざるべからず。

日本が現在將來に亘りて世界に對し、東洋に對し、戰後の東洋平和維

持者の任を盡さんとならば、メテルニヒが墺國の外交として施したる八方美人的外交政策を以てしては不可なり、如何にも十九世紀の外交界に於ては實力に依るより外に良策はあらざるなり、其實力とは兵力即ち海陸軍戰闘力の外にはあらざるなり、痼を治するには劇藥を要するが如く、平和を維持するには兵戰の必要なる時あるなり、此に至て我邦が亞細亞に對し歐羅巴に對して、東洋の平和を維持するたけの海陸軍の整備の必要たることは苟も我邦が第十九世紀外征進化の大勢を適用して國家の方針を定めんとする以上は、如何にも離るべからざる問題なり、其海陸軍擴張の程度及方針に就ては方案なきにあらざれど本論の目的よりして單に學理の適用に止め置くなり。

又海軍擴張の如きも徒らに其船艦水雷艇を增加するのみならず第一に士官及水兵の養成、軍港、兵器製造所等の創設も含み居るなり、又陸

軍の擴張に於ては師團を增加するのみならず第十出師準備は勿論、海岸防禦、國民軍の編製總べて實戰の充分なる準備の豫め整ひ居ることを必要なり、今儻かに清國に打ち勝てりとて油斷すべからざるなり、一刻も早く海陸軍の擴張に着手せざるべからず、戰爭終局後早くも之に着手するときは最早準備も頗る進み居る處なり、其の玆に出でざりしは千歲の遺憾なり。

所謂進化の定義は最初既に述べたる如く一部に於て物の動くも、各部能く調合して一緒に動かざるときは進化の原則に適せざるなり、海陸軍擴張の一部たけ進むも、他の物にして齊しからざるときは國家國民の功名を眞成に擴め、東洋平和の維持の本務を盡くすこと能はざるなり、斯くの如くにしては進化の原則に適せざるなり、海陸軍擴張と同時に外交の擴張は必要なり、假令戰ひに勝つも外交に負くるが如きあらば、

何の効か是れあらん、是れ既に我が國の經驗する所ならずや。

此際外交の擴張に就ては彌〻益す國民の大決心を要するは勿論なり、平時戰時とを問はず必要なるは外交にして、十九世紀の大勢に乘じ東洋の平和を保全し、國利を進めんには敏腕の外交官を最も必要とす、而かして外交官の軍器は金なり、軍器なしに外交上に戰ふことは無理なることなり、充分に黃金を散じて、手腕を揮はしめ、又東洋の平和を主眼として東邦問題中の各國各地と通商條約を訂結し、公使を派遣し、北京には將來大使を駐劄せしめ、外交的機關の活動をして健全ならしめ、以て東洋の平和を維持するに足るの引き廻しを附け、又歐羅巴の首府には敏腕の外交官、即ち第十九世紀外征進化の大勢を解し得る頭腦を有せる人物を派遣して外交の局に當らせざるべからず。

世界及び其一部の平和を維持する點よりして外征進化の應用の大略を

敍したり、外征進化の大勢の他の原素なる「ナショナル・インテレスト」即ち國利を進めることと、言を換へて之を言へば、日本の商工業の進歩發達を計る點の應用は如何、今其大略を述べんに、我が邦は東洋——太平洋の諸邦に我邦の商工業を進めゆくことを充分に遂行するの任務を有す、是を以て始めて政治上對外策以外、所謂商業對外策、工業對外策を確立せざるべからざることゝなる、即ち商業對外工業對外の二策を立てゝ「ナショナル・インテレスト」即ち國利の發達を謀ることゝ、是れ第十九世紀の外征進化の大勢に適するものなり、是に就ては我が邦は第一に世界に對する義務として亜細亞平洋に於ける商業上の市場を開拓せざるべからず、其次に支那の大陸を商業地に開く爲めには、縱令ひ兵力を以て外征するも十九世紀に於ては名義我に存するなり、英國の如きは從來常に東洋に對して砲艦政策を適用し、而かも將來に

萬里の波濤を開拓す

於ても亦た時宜を應じて之を用ふべし、我が邦も亦た外征進化の大則に依り名義の正しき砲艦政略を利用せざるべからず。

斯くの如く日本の義務として支那及亞細亞大陸に市場を開き、又太平洋を開く、海洋を開くとは奇言の如しと雖も言を換へて之を言へば太平洋に航路を開くことゝなり、日本は此際に當り、太平洋の物貨集散の權を日本に握り、亞細亞大陸、南洋或は亞米利加に對する物貨集散の地を我邦に定め、以て太平洋時代に於ける我が邦の商權を張ることを本邦商業對外策の大本として、今日より着々實準備を整へ、其人物其資力其商戰の根據と其作戰の計畫萬端を整へざるべからず。又西比利亞鐵道及ニカラグア運河の成就するときは、世は今日の如く大西洋の時代にあらずして直に太平洋の時代に移りゆくに相違なし、而かも之に達するには長時日を要せざるなり、故に日本の航路擴張は奮發して

太平洋時代

航路擴張

國有航路

一日も速かに之を行はざるべからず、太平洋の制海權を速かに掌握しおかざれば我が邦の商業對外策は決して立つこと能はざるなり、航路擴張就ては余も一種の考案あり、日本の航路は之を國有航路と爲すこと、是れ余が平生の持論なり、其次に日本は太平洋沿岸各邦の商業上の問屋と爲らんには、日本の各所に錨港を爲して物貨集散の門戸を造るの必要あるなり、又其次には亞米利加及亞細亞大陸に電信線を聯絡するも必要なり、余の見る所を見てすれば一は北海道宗谷より樺太電信に連絡し、一は北海道より亞米利加のアラスカへ連絡せば、日本は自然太平洋の中央地の委を爲すべし、且つや亞細亞北部商業上に對しては、其物貨集散の門戸を造りて之れが門番と爲り、亞細亞北部の商權を掌握す、亦た是れ商業對外上の一國策なり、其他此の大旨意を

築港

電信

北亞貨物集散の門戸

國利の一部なる工業は如何、日本工業對外策の大本は亞細亞大陸、南洋諸島、其他太平洋の沿岸地方に對しては十九世紀の器械的製造を與し、歐洲先進諸國殊に東洋に工業上勢力を有せる英國等と着々互に競爭を爲し、我が邦に於ては兎に角、紡績、製綿、製鐵、造船等の如き「メカニカル、インダストリー」を進めゆき、太平洋沿岸の亞細亞大陸、南洋及び亞米利加の地方を市場とする目的を以て何の國とも競爭し、國利の衝突上止むを得ざる場合には兵力を以ても之を保護するの覺悟必要なり、次に歐洲及亞米利加西部に對する工業對外策は容易ならざる問題なり、余の見る所を以てすれば、歐洲及米國西部諸邦に對し日本の前途工業競爭の要は、彼の世俗に唱ふる如き日本の美術に非ずして、日本固有美術的の工藝品を以て其市場に當るべきことなり、凡そ物は彼に備はらざるなし、去れど日本固有の工藝品に至ては一種特別

なるものなれば、他の國利を害せずして市場を占むることを得るなり、翻て今日の現狀を見よ我が邦の輸出品は此種類の物にあらずや、斯くの如く歐米に對する工業と、太平洋沿岸諸邦に對する工業を明かに區別するときは、先づ第一の問題は日本に於て機械的工業の中心點は石炭の産地に定むべき乎、將た水力電氣應用地に定むべき乎、是れ我邦の工業對外策の大問題なり。

歐洲に對する日本固有美術的の中心點は勿論京都を以て適當とすべし、余は京都に於ける第四回博覽會に於て、我が邦の東洋、南洋に對する工業對外策の將來を知ることを得て、國家の爲め欣喜に堪へざるものあるなり、第四回博覽會は概して之を言へば模造品の博覽會と稱するも認言にあらざるなり、日本人が眞似のみをなすを惡しく言へる人ありと雖も、余は頗る面白き現象として之を見るなり、何をなれば

不釣合

此くの如き模造的工業貨物は、即ち所謂十九世紀機械的工業發達の徴候に外ならざるが故なり、英國現今の工業も其源はエリザベス時代に和蘭の製造品を模造せるもの發達して今日の「ナショナル、インダストリー」となれるなり。

又余が京都の博覽會を見て感情を起したるは、品物と其品物市場の釣合ひを得ざること、其市場は東南洋に亙れる廣大なるものに對し其物品製造の規模の小なること甚し、此缺點は製造家に資本の薄弱なるに由る、故に財務の當局者たるもの盡力して工業銀行の創立を見ば對外工業上の大利益は漸々に發達することなるべし、商工業對外策に就て述ぶべきこと猶ほ多しと雖も玆には大躰の應用を述ぶるに止む。

又外征進化大勢の一原素なる世界の文化を進める點に至て、我が邦が爲すべきことの第一は亞細亞大陸の中央に在る西藏（チベット）探檢なり、是れは

世界の「ミステリー」即ち神秘的國土として殘り居るものなり、佛國の大人も西藏の首府に入りて、充分なる探究を行ひ得たるものは未だ有あらざるなり、故に著し能く之を探檢して其効を奏するときは、世界言語學、人種學、宗教、美術上に發明すること多々あるべし、西藏人と同じく佛教を奉ずる日本人が之を探檢して、以て西藏を世界に紹介せば、世界の文化を進める上に好成績あることは實に鮮少ならざるべし、殊に馬關に於て日清媾和の商議中に當りて、吾人は其平和條約の一ヶ條に西藏探檢のことを加へんことを切望したり、其條約の精神は、將來日本人民西藏探檢の爲めに遠征隊を組織し清國を横斷して通過するときは同國は之が爲に充分なる便宜を與ふべしと云ふに在りて、之を挿加することを忠告せしと雖も、斯くの如き高尚なる點には着眼せらるゝことなかりき、又支那の阿片の問題及支那婦人の纏足等の問題も

思考を要すべき問題なり。

其次は南洋諸島に至り見るときは則ち、歐洲の諸國が東洋の文化を進むる爲に殖民を事とするにあらずして、却て其地の文化進歩を妨げる政治を爲すもの多し、臺灣の如きも、日本の占領前は支那の有害無益なる社會組織及政治組織を施し居りたるものにして、將來は日本より大陸の開發して政治上の秩序と社會上の秩序とを正しふせしめ、加ふるに十九世紀の科學の進歩、鐵道、電信を架設し、且つ商業、工業を進めて、其植民の幸福を增進せしむることは、十九世紀の大勢に適せる美事なり、猶ほ一歩前進せば斯くの如き處は必ず多かるべし、英獨諸國の如きは單に非利加の文化を進むる爲と稱し中央亞非利加を分割せしにあらず、其施清國及び朝鮮に鐵道を布設し、電信を架設し、郵便租稅の真制度を施行せしむる問題等は、寧ろ研究すべきものなり、

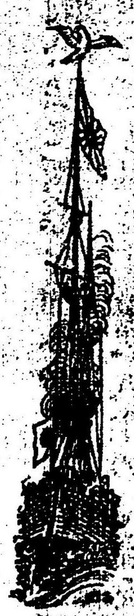
海漁業區を確定し、或は萬國公法に新條を加へ、若くは之を更正するが如き問題等もあるなり、然れども畢竟するに人生の幸福を增進するに形而上なる道德を進めざれば政治も社會も能く進むこと能はざるなり德義の根基なければ世界の文化を進める定義に適せざるなり、故に如何に鮮麗なる洋服を着するも、主人公の道德心乏しきときは其人は猶ほ野蠻人たることを免がれざるなり、日本の教育も國民の心を高尙にし、信用を措かるゝ程に責任を重んじ、奉公心を篤くするにあらざれば、十九世紀の所謂世界文化を進化するの點に合せざるなり。」

抑も我が日本國固有のものにして、將來世界の文明に裨益を與ふべきもの二あり、第一は武士の魂、言を換へて之を言へば日本魂と稱する奉公心の正純なるものあり、日清戰爭に於て世界の耳目を驚かしたるものは此無形一片の心なりき、我が國人は之を十九世紀世界文化の一

原素となすの覺悟あらざるべからず。

第二は國人の腦裏に銘せる皇室と云ふ觀念なり、是れは世界に比類無き、理窟以外に超絶したる正純無垢の感情（フィリング）にして、宗教等の及ぶ所にあらず、遙かに其れ等以上の高尚深遠宏大なる力なり、蓋し我が皇室は仁を經とし、義を緯とし國民を治め玉ふ、斯くの如き皇室は世界中何の處にか在る。

是れ此世界無類の忠誠心をも世界文化の一原素となすまでに日本人は覺悟せざるべからず、實に我國民は此忠誠心を以て第二十世紀の外征進化の大勢の一原素となすの決心を要す、是れ日本國民の勉むべき所なり。



明治二十九年三月二十日印刷
同　年四月　二日發行
定價金十五錢

版權所有

發行者　東京市京橋區日吉町四番地　垣田純朗
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　高田乙三
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

法政図第一課
32.7.30
調査立法ノ二

◎民友社出版書目◎

平田久著

露西亞帝國

紙數 四百七十三頁
定價 卅五錢 郵稅六錢
肖像 露帝ニコラス二世
地圖 露西亞の膨脹 中央亞細亞の進擊
ペミール高原 悉比利亞鐵道

各新聞の批評

◎時事 ●●著者の言葉に曰く今日の時勢に於て露西亞の事情を知るは日本の事情を知る所以にして之を學ぶは學問の爲めにあらず實に我等生活の必要に因れりと即ち此書は能く時勢に應じて著はしたるものと云ふべし著者は平田久氏なり

◎教育時論 ●●●四百五十六頁の大冊子、是れ平田久氏が露西亞帝國研究の蹤迹吳廣たらんことを期して、著したるもの。地理あり、歷史あり、國民の特質あり、日本國民の心得として必一讀すべく、將來露西亞帝國研究の途に上らんと欲するものも、讀んで以て其方針を確定すべし。

◎毎日 ●●東洋に事多く、遂に露西亞が東洋の政治舞臺に其脚を振ばんとする傾向あるに至りしより、露國のことを談論するもの、著述するもの少しまゝず。然れども始終相

臆し、所論確實なるもの、所謂完成の著述未だ世に公にせられしとなし。然るに頃日民友社員平田久氏の著述にかゝる「露西亞帝國」てふ大冊(四百七十三頁)出で、漸くこの感去る、可喜可喜。」今まこの「露西亞帝國」を閲するに、「露西亞……の諸問題に就き頗る叮嚀に論辯されぬ。文章の美、徴證の周到なるには感服の外なし。著者がこの大文字をものせんとて費されし研究考證の勞は定めて容易ならざりしならん。バルカン、印度、朝鮮問題に付き著者の論述されしうちには(六八ページより三〇三まで)、露國に於て曾て耳にすることを得ざると多く甚面白し、且つ最も有益ならん云々

◎基督教新聞　筆を露西亞の天然に起し其膨脹力、同化力を說きて國民に及ぼす感情を惹起し尼格第二世を總論として掲げ附ろに有像を以てし巻中露西亞膨脹地圖中央亞細亞侵略地圖、パミール高原地圖悉比利亞貫通大鐵道地圖を挿む全篇四百五十六頁草を別ち節を立つる處も推して近來の好著と謂ふべし云々

◎神戸實業新聞　露西亞てふ名稱は今や我國人に一種言ふ可らざる感情を惹起し露西亞なる者は實に我邦朝野の間に於ける最大重量の問題となり將來に於ける我が帝國の關係は方針を一定するは勿論此問題の解釋に待たざる可らず左れど今まで露國通信を讀せんと欲せば須らく露西亞帝國の眞相を究めて之を我が國人に紹介せん事を試み而して又能くその目的を遂したるを謂ふこと得べし……(○)……露國はその材料の捻出者が最も苦心を用ひたる所なるべく文章流麗布置亦その宜を失はず就中露西亞膨脹を論ずるの一篇五章は當時佛國經濟學者の

比律賓群島

民友社編纂

定價　郵稅　拾八錢　四錢

精細なる地圖及十葉挿入

「日本」の評　一筆水を隔て、書海に隣るものを比律賓群島となす。書評已に菩提圖に入る。豈に其開國の形勢を發揮せざるべけんや。機を制するは國家の務なり。民友社の此著眼を賞すべきなり。

「讀賣新聞」の評　曾に故堀の「露西亞帝國」を江湖に紹介したる民友社にては、今又南國の「比律賓群島」なるに從ひ之を江湖に紹介したる。今此書に比すれば稍繁なる點に於て稍や勝る所なきに非らざれども、尚ほ我新版圖を一筆の清水を隔てゝ、未雜敵視するをもつて、比律賓群島に付き我

雜誌「海の日本人生活」第一巻第二號

目次

- 北海道の漁業（一）……（一）
- 北海道の漁業（二）……（一）
- 北海道の漁業（三）……（一）
- 北海道の漁業（四）……（一）
- 北海道の漁業（五）……（一）
- 北海道の漁業（六）……（一）
- 北海道の漁業（七）……（一）
- 北海道の漁業（八）……（一）
- 北海道の漁業（九）……（一）
- 北海道の漁業（十）……（一）
- 北海道の漁業（十一）……（一）
- 北海道の漁業（十二）……（一）
- 北海道の漁業（十三）……（一）
- 北海道の漁業（十四）……（一）
- 北海道の漁業（十五）……（一）
- 北海道の漁業（十六）……（一）
- 北海道の漁業（十七）……（一）
- 北海道の漁業（十八）……（一）
- 北海道の漁業（十九）……（一）
- 北海道の漁業（二十）……（一）
- 北海道の漁業（二十一）……（一）
- 北海道の漁業（二十二）……（一）
- 北海道の漁業（二十三）……（一）
- 北海道の漁業（二十四）……（一）
- 北海道の漁業（二十五）……（一）
- 北海道の漁業（二十六）……（一）
- 北海道の漁業（二十七）……（一）
- 北海道の漁業（二十八）……（一）
- 北海道の漁業（二十九）……（一）
- 北海道の漁業（三十）……（一）
- 北海道の漁業（三十一）……（一）
- 北海道の漁業（三十二）……（一）
- 北海道の漁業（三十三）……（一）
- 北海道の漁業（三十四）……（一）
- 北海道の漁業（三十五）……（一）
- 北海道の漁業（三十六）……（一）
- 北海道の漁業（三十七）……（一）
- 北海道の漁業（三十八）……（一）
- 北海道の漁業（三十九）……（一）
- 北海道の漁業（四十）……（一）
- 北海道の漁業（四十一）……（一）
- 北海道の漁業（四十二）……（一）
- 北海道の漁業（四十三）……（一）
- 北海道の漁業（四十四）……（一）
- 北海道の漁業（四十五）……（一）
- 北海道の漁業（四十六）……（一）
- 北海道の漁業（四十七）……（一）
- 北海道の漁業（四十八）……（一）
- 北海道の漁業（四十九）……（一）
- 北海道の漁業（五十）……（一）
- 北海道の漁業（五十一）……（一）
- 北海道の漁業（五十二）……（一）
- 北海道の漁業（五十三）……（一）
- 北海道の漁業（五十四）……（一）
- 北海道の漁業（五十五）……（一）
- 北海道の漁業（五十六）……（一）
- 北海道の漁業（五十七）……（一）
- 北海道の漁業（五十八）……（一）
- 北海道の漁業（五十九）……（一）
- 北海道の漁業（六十）……（一）
- 北海道の漁業（六十一）……（一）
- 北海道の漁業（六十二）……（一）
- 北海道の漁業（六十三）……（一）
- 北海道の漁業（六十四）……（一）
- 北海道の漁業（六十五）……（一）
- 北海道の漁業（六十六）……（一）
- 北海道の漁業（六十七）……（一）
- 北海道の漁業（六十八）……（一）
- 北海道の漁業（六十九）……（一）
- 北海道の漁業（七十）……（一）
- 北海道の漁業（七十一）……（一）
- 北海道の漁業（七十二）……（一）
- 北海道の漁業（七十三）……（一）
- 北海道の漁業（七十四）……（一）
- 北海道の漁業（七十五）……（一）
- 北海道の漁業（七十六）……（一）
- 北海道の漁業（七十七）……（一）
- 北海道の漁業（七十八）……（一）
- 北海道の漁業（七十九）……（一）
- 北海道の漁業（八十）……（一）
- 北海道の漁業（八十一）……（一）
- 北海道の漁業（八十二）……（一）
- 北海道の漁業（八十三）……（一）
- 北海道の漁業（八十四）……（一）
- 北海道の漁業（八十五）……（一）
- 北海道の漁業（八十六）……（一）
- 北海道の漁業（八十七）……（一）
- 北海道の漁業（八十八）……（一）
- 北海道の漁業（八十九）……（一）
- 北海道の漁業（九十）……（一）
- 北海道の漁業（九十一）……（一）
- 北海道の漁業（九十二）……（一）
- 北海道の漁業（九十三）……（一）
- 北海道の漁業（九十四）……（一）
- 北海道の漁業（九十五）……（一）
- 北海道の漁業（九十六）……（一）
- 北海道の漁業（九十七）……（一）
- 北海道の漁業（九十八）……（一）
- 北海道の漁業（九十九）……（一）
- 北海道の漁業（百）……（一）

雜誌「海の日本人生活」第一巻第二號

明治二十一年一月二十日　印刷
明治二十一年一月二十五日　發行

編輯人　木生活
印刷人　海の日本人
發行所　海の日本人生活

青年叢書

第三卷 娛樂俱樂部界
第四卷 事務世界

第一卷 武備教育
第二卷 遠征術
別卷外 本朝民論
第三卷 市民術
第四卷 職業論
第五卷 技術生涯
第六卷 學校教育

家庭叢書

第一卷 家庭の和樂
第二卷 夏の衛生
第三卷 玩具と美育
第四卷 家庭教育
第五卷 小兒養育
第六卷 家庭整理
第七卷 家事簡易法
第八卷 社交と禮儀
第九卷 婦人と職業
第十卷 一家和合の料理

	郵定稅價	冊數	卷數
娛樂俱樂部界	郵定稅價	二十二冊	第三卷 第四卷
事務世界	郵定稅價	二十二冊	第三卷 第四卷
武備教育	郵定稅價	十二冊	第一卷
遠征術	郵定稅價	十二冊	第二卷
本朝民論	郵定稅價	十二冊	別卷外
市民術	郵定稅價	十二冊	第三卷
職業論	郵定稅價	十二冊	第四卷
技術生涯	郵定稅價	十二冊	第五卷
學校教育	郵定稅價	十二冊	第六卷
家庭叢書	郵定稅價	二十二冊	第一卷 第十卷

平民叢書

既刊外

家庭と名士　理家　財庭　定郵定價二十二錢

第一卷　十九世紀世界經濟上の大變動　勢　定郵定價二十二錢

第二卷　世界經濟上の大變動　傳　定郵定價二十二錢

第三卷　國家と其の主權　治　定郵定價二十二錢

第四卷　教育と政治　義　定郵定價二十二錢

第五卷　文明之弊及其救濟　德　定郵定價二十二錢

第六卷　現時之社會主義　法　定郵定價二十二錢

第七卷　經濟上の大變動　勢　定郵定價二十二錢

第八卷　歷史と道徳　附　定郵定價二十二錢

既刊外

哲學入門　傳　定郵定價二十二錢

第九卷　哲學概論　傳　定郵定價二十二錢

第十卷　自由と人權　變　定郵定價二十二錢

第十一卷　銀貨之過去現在未來　遷　定郵定價二十二錢

既刊外

青年と思想界の變遷　定郵定價二十二錢

靜座と修養　退歩　定郵定價二十二錢

女學生と斷食　退歩　定郵定價二十二錢

天然と人物　進歩　定郵定價二十二錢

8

國民叢書

既刊外

家庭と名士　理家　財庭　定郵定價二十二錢

第一卷　十九世紀世界經濟上の大變動　勢　定郵定價二十二錢

第二卷　世界經濟上の大變動　傳　定郵定價二十二錢

第三卷　國家と其の主權　治　定郵定價二十二錢

第四卷　教育と政治　義　定郵定價二十二錢

第五卷　文明之弊及其救濟　德　定郵定價二十二錢

第六卷　現時之社會主義　法　定郵定價二十二錢

第七卷　經濟上の大變動　勢　定郵定價二十二錢

第八卷　歷史と道徳　附　定郵定價二十二錢

既刊外

哲學入門　傳　定郵定價二十二錢

第九卷　哲學概論　傳　定郵定價二十二錢

第十卷　自由と人權　變　定郵定價二十二錢

第十一卷　銀貨之過去現在未來　遷　定郵定價二十二錢

既刊外

青年と思想界の變遷　定郵定價二十二錢

靜座と修養　退歩　定郵定價二十二錢

女學生と斷食　退歩　定郵定價二十二錢

天然と人物　進歩　定郵定價二十二錢